

カリキュラム区分	科目名		単位数
	特別研究Ⅲ（3年次・通年）		4単位
担当者職・氏名	教授・関谷融		
授業概要とテーマ	特別研究Ⅲでは、特別研究Ⅱの成果を土台に適切なアドバイスやリサーチの仕方の指導を通して博士の学位に相応しいレベルの研究論文を完成することができるよう研究指導を行い、博士論文を完成させる。さらに、メディア研究に関する国内外の知見の進歩を考慮に入れるよう最新の研究論文・総説などを紹介させ、研究成果の学会や学術論文への発表などを通して、研究者として独り立ちできる能力を身につけさせる。		
到達目標	1) 先行する研究内容等を踏まえて立案した研究方法にしたがって、研究を遂行できる。 2) 研究結果を適切に解釈し、研究結果を適切にまとめ、博士論文を完成させることができる。 3) 研究結果を学会や学術論文により適切に発表できる。 4) 得られた研究結果の学問的意義を客観的に理解できる。		
授業計画	回	主題	授業内容
	1～2	研究成果のまとめ（1）	得られた研究結果を整理する（特別研究Ⅱで作成したプロトタイプ論文の推敲）。
	3～4	研究成果のまとめ（2）	得られた研究結果についての学問的意義を考察する。
	5～6	研究の修正・追加（1）	得られた研究結果について、必要な修正・追加研究を行う。
	7～8	研究の修正・追加（2）	得られた研究結果について、必要な研究結果の修正を行う。
	9～10	研究の修正・追加（3）	得られた研究結果について、必要な研究結果の解釈の修正を行う。
	11～12	研究の修正・追加（4）	得られた研究結果について、最終的な修正・追加研究を行う。
	13～14	博士論文の作成（1）	研究成果を博士論文にまとめる（章立ておよび題目の決定）。
	15～16	博士論文の作成（2）	研究成果を博士論文にまとめる（各章の執筆と報告）。
	17～18	博士論文の作成（3）	研究成果を博士論文にまとめる（各章の推敲と校正）。
	19～20	博士論文の作成（4）	研究成果を博士論文にまとめる（論文全体の推敲と校正）。
	21～22	博士論文の作成（5）	研究成果を博士論文にまとめる（参考文献の検討）。
	23～24	博士論文の作成（6）	研究成果を博士論文にまとめる（論文全体の要約と報告）。
	25～26	プレゼンテーション（1）	学会や学術雑誌での研究成果の発表のため、プレゼンテーションや論文の執筆を行う（原稿の作成）。
	27～28	プレゼンテーション（2）	学会や学術雑誌での研究成果の発表のため、プレゼンテーションや論文の執筆を行う（図表の作成、レイアウト設定）。
29～30	総括	研究の総括と、今後の課題について考察する。	
		定期試験は実施しない	成績評価については「成績評価の方法」欄参照
成績評価の基準	A(優)・・・80～100点 B(良)・・・70～79点 C(可)・・・60～69点 D(不可)・・・59点以下		
成績評価の方法	授業に取り組む姿勢（各段階での進捗状況を発表・レポートする）20%と学習内容の理解度（発表・審査用論文の内容が水準に達している）80%から総合的に評価する。		
テキスト	特に設定しない。		
参考文献	特に設定しないが必要に応じて学術論文等の文献を事前に指示する。また、各自必要に応じて適切な参考書を選択すること。		
科目のキーワード	メディア利活用、基礎構造、クロスメディア		
授業の特徴	特別研究Ⅱに引き続き研究を実行し、結果の解釈・考察をまとめて博士論文を完成する。また、プレゼンテーションの方法等について習得する。		
関連科目	アカデミックスキル特講、地域創生学特講、地域システム特講、特別研究Ⅰ、特別研究Ⅱ		
履修上の注意等（履修条件等）	統計学や情報学、経済学などの知見・観点も加味した研究テーマの設定を期待する。		

カリキュラム区分	科目名		単位数
	特別研究Ⅲ（3年次・通年）		4単位
担当者職・氏名	祁建民		
授業概要とテーマ	近現代中国の政治社会研究(学位論文の作成)		
到達目標	近現代中国の政治社会研究とは、国家権力と社会との関係特に農村社会における権力構造・国家権力の動きと国家意思の滲透などの解明を目指し、文献資料の解読と現地調査を行って、学位論文の作成を通じて、高度な研究能力を修得させる。		
授業計画	回	主題	授業内容
	1～2	研究テーマの確定1	問題意識と先行研究
	3～4	研究テーマの確定2	研究内容の設定
	5～6	資料調査1	文献資料を調べ、その所在状況を確認する
	7～8	資料調査2	研究資料の整理、分類、資料の信憑性
	9～10	学位論文の構成1	論文の章立てを確定
	11～12	学位論文の構成1	研究論文内容を調整する
	13～14	学位論文の作成1	問題意識の文字表現方法、分かりやすいと簡潔
	15～16	学位論文の作成2	文脈の一貫性を指導する。ロジック問題
	17～18	学位論文の作成3	論文の資料使用方法、資料利用の注意点
	19～20	学位論文の作成4	研究倫理の指導、盗作防止
	21～22	学位論文の作成5	研究論文の引用文献、注釈注意事項を指導する
	23～24	学位論文の作成6	研究論文の修正、問題点
	25～26	学位論文の作成7	研究資料の補充調査、論証補強
	27～28	学位論文の作成8	研究論証の問題点
29～30	学位論文の作成9	研究論文の再修正、提出	
成績評価の基準	A(優)・・・80～100点 B(良)・・・70～79点 C(可)・・・60～69点 D(不可)・・・59点以下		
成績評価の方法	レポート50%、発表50%にて評価する。		
テキスト	特に指定しない。		
参考文献	授業中に指定する。		
科目のキーワード	学位論文の作成、文字表現方法、論証方法		
授業の特徴	学位論文の作成までに丁寧に指導する。問題意識・資料調査・表現方法・論文の一貫性・論証の厳密などを指導する。		
関連科目	地域創生学特講、地域創生学演習		
履修上の注意等 (履修条件等)	独立研究できるまでに、自主的に学習する。		

カリキュラム区分	科目名	単位数	
	特別研究Ⅲ（3年次・通年）	4単位	
担当者職・氏名	教授・山本周		
授業概要とテーマ	本講義は特別研究Ⅱに引き続き、研究成果の学会や学術論文への発表などを通して、高度な研究能力の養成を図る。博士号に相応しい学術価値の高い博士論文を完成に向けて、修正、改訂を繰り返し、作成された論文の内容を再検討と再確認を経て、最終チェックを行い、質の高い博士論文を完成できるように助言、指導する。		
到達目標	博士論文を執筆の力を身につけること。		
授業計画	回	主題	授業内容
	1～2	ガイダンス・研究タイムテーブル	ガイダンス・研究タイムテーブルの確認。
	3～4	研究テーマに関する討論	進捗状況の報告（2）
	5～6	研究テーマに関する討論	論文の執筆（1）
	7～8	研究テーマに関する討論	論文の執筆（2）
	9～10	研究テーマに関する討論	論文の執筆（3）
	11～12	研究テーマに関する討論	論文の執筆（4）
	13～14	研究テーマに関する討論	論文の執筆（5）
	15～16	研究テーマに関する討論	論文の執筆（6）
	17～18	研究テーマに関する討論	進捗状況の報告（2）
	19～20	研究テーマに関する討論	論文の執筆（7）
	21～22	研究テーマに関する討論	論文の執筆（8）
	23～24	研究テーマに関する討論	論文の執筆（9）
	25～26	研究テーマに関する討論	論文の執筆（10）
	27～28	研究テーマに関する討論	論文の執筆（11）
29～30	研究テーマに関する討論とまとめ	まとめ	
	定期試験は実施しない	成績評価については「成績評価の方法」欄参照。	
成績評価の基準	A（優）・・・80～100点 B（良）・・・70～79点 C（可）・・・60～69点 D（不可）・・・59点以下		
成績評価の方法	授業に取り組み姿勢と研究内容の理解度から総合的に評価する。 ディスカッション40% 研究レポート 30% 研究発表 30%		
テキスト	特に指定しない。		
参考文献	受講者の研究テーマに応じて資料文献を中心に、適宜指示します。		
科目のキーワード	中国文化		
授業の特徴	ディスカッションを中心とする。		
関連科目			
履修上の注意等（履修条件等）	研究タイムテーブルの順守。		

カリキュラム区分	科目名		単位数
	特別研究Ⅲ（3年次・通年）		4単位
担当者職・氏名	教授・谷澤毅		
授業概要とテーマ	流通が地域の発展にいかに関与してきたかを明らかにするために、地域外とのつながりを考慮しながら近世・近代ヨーロッパなどの特定の都市地域を題材として研究指導を行う。特別研究Ⅱに引き続き、研究指導教員による継続的な研究指導体制をとり、博士の学位に相応しい水準の研究論文を完成させることができるよう研究指導を行う。必要に応じて他領域の教員から指導を受ける機会を設けながら、研究成果の学会での発表や学術雑誌への投稿などを通じて高度な研究能力の養成を図る。		
到達目標	1) 先行研究を十分くみ取ったうえで自らが設定した研究テーマ、計画に基づいて研究を遂行することができる。 2) 研究結果を適切に解釈し、その結果を適切に文章にまとめることができる。 3) 研究結果を学会や学術雑誌などで適切に発表することができる。 4) 得られた研究結果について、その学問的な意義を客観的に理解することができる。		
授業計画	回	主題	授業内容
	1, 2	研究成果のまとめ（1）	得られた研究結果を研究過程と照らし合わせて考察する。
	3, 4	研究成果のまとめ（2）	得られた研究結果の学問的な意義を考察する。
	5, 6	研究成果の修正・追加（1）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な修正、追加研究を行う。
	7, 8	研究成果の修正・追加（2）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な研究結果の修正を行う。
	9, 10	研究結果の修正・追加（3）	他領域の教員からの教員の指摘も含めて、必要な研究結果の解釈の修正を行う。
	11, 12	研究結果の修正・追加（4）	他領域の教員からの指摘も含めて、最終的な修正・追加研究を行う。
	13, 14	プレゼンテーション（1）	学会での報告や学術雑誌への投稿に備えてこれまでの研究内容を整理する。
	15, 16	プレゼンテーション（2）	学界での報告や学術雑誌への投稿に向けてレジユメの作成や論文の執筆を進める。
	17, 18	博士論文の作成（1）	これまでの成果を博士論文にまとめ、執筆を進める。
	19, 20	博士論文の作成（2）	序論と結論を考慮しながら博士論文の本論の執筆を進める。
	21, 22	博士論文の作成（3）	史資料、文献が適切に利用されているか考慮しながら博士論文の執筆を進める。
	23, 24	博士論文の作成（4）	全体の論旨を考慮しながら博士論文の執筆を進める。
	25, 26	博士論文の作成（5）	注付けがきちんとなされているか考慮しながら博士論文の執筆を進める。
	27, 28	博士論文の作成（6）	最終的な追加、訂正を施しながら博士論文をまとめる。
29, 30	総括	これまでの研究を総括し、今後の研究について考察する。	
	定期試験は実施しない	成績評価については「成績評価の方法」欄参照	
成績評価の基準	A(優)・・・80～100点 B(良)・・・70～79点 C(可)・・・60～69点 D(不可)・・・59点以下		
成績評価の方法	授業の理解度をレポートや発表にて評価する。また質疑応答やディスカッションへの参加状況などの学習態度も評価の対象となる。 評価配分は、レポート50%、発表30%、学習態度20%		
テキスト	特に設定しない。		
参考文献	社会経済史学会編『社会経済史学の課題と展望』有斐閣、2012年、辛島昇・高山博編『地域の成り立ち』山川出版社、2000年など。必要に応じて文献は適宜紹介する。		
科目のキーワード	流通史、社会経済史、都市史、地域史		
授業の特徴	特別研究Ⅱに引き続き、地域流通史に関連した研究テーマについて課題を設定し、流通が地域の発展にいかに関与してきたかを明らかにするための研究を実施する。地域の発展について社会経済史学を土台として流通史の面から光を当てる。		
関連科目	アカデミックスキル特講、地域創生学特講、地域創生学演習、地域マネジメント特講、特別研究Ⅰ、特別研究Ⅱ		
履修上の注意等（履修条件等）	地域社会マネジメントの領域を基盤としながら、情報の歴史や地域住民の栄養・健康状況に関連させて食材の生産や流通、消費の歴史などと関連した研究テーマを期待したい。		

カリキュラム区分	科目名		単位数
	特別研究Ⅲ（3年次・通年）		4単位
担当者職・氏名	教授・山本裕		
授業概要とテーマ	特別研究Ⅱに引き続き、国際交通に関して研究指導教員による継続的な研究指導体制をとり、博士の学位に相応しいレベルの研究論文を完成することができるよう研究指導を行う。また、必要に応じて他領域の教員からの指導を受けながら、研究成果の学会や学術論文への発表などを通して、高度な研究能力の養成を図る。		
到達目標	<p>(1) 国際交通研究に関するテーマと研究方法に即して研究を遂行できる。</p> <p>(2) 研究テーマに関する文献調査や実証的な調査を、適切にまとめることができる。また、分析手法を結果の分析に反映することができる。</p> <p>(3) 研究結果を学会や学術論文に発表できる。</p> <p>(4) 研究結果の学問的意義を客観的に理解できる。</p>		
授業計画	回	主題	授業内容
	1～2	研究成果のまとめ（4）	研究結果を考察し、適宜追加・修正を行う。
	3～4	研究成果のまとめ（5）	研究結果を考察し、適宜追加・修正を行う。
	5～6	研究成果のまとめ（6）	研究結果を考察し、適宜追加・修正を行う。
	7～8	研究成果のまとめ（7）	研究結果を考察し、適宜追加・修正を行う。
	9～10	研究成果のまとめ（8）	研究結果を考察し、適宜追加・修正を行う。
	11～12	研究成果の発表（1）	学会発表に向けたプレゼンテーションの準備と発表。
	13～14	研究成果の発表（2）	学会発表に向けたプレゼンテーションの準備と発表。
	15～16	博士論文の作成（1）	研究成果を博士論文にまとめる。論文作成のあたりは、他領域、他分野の教員にも相談する。
	17～18	博士論文の作成（2）	研究成果を博士論文にまとめる。
	19～20	博士論文の作成（3）	研究成果を博士論文にまとめる。
	21～22	博士論文の作成（4）	研究成果を博士論文にまとめる。
	23～24	博士論文の作成（5）	研究成果を博士論文にまとめる。
	25～26	博士論文の作成（6）	研究成果を博士論文にまとめる。
	27～28	博士論文の作成（7）	研究成果を博士論文にまとめる。
29～30	総括	研究の総括と今後の研究展望。	
		定期試験は実施しない	成績評価については「成績評価の方法」欄参照のこと。
成績評価の基準	<p>A(優)・・・80～100点</p> <p>B(良)・・・70～79点</p> <p>C(可)・・・60～69点</p> <p>D(不可)・・・59点以下</p>		
成績評価の方法	授業に取り組む姿勢と学習内容から総合的に評価する。		
テキスト	特に設定しない。		
参考文献	ストップフォード、星野・篠原監訳（2014）『マリタイム・エコノミクス第3版』上巻・下巻、日本海運集会所。Maritime Policy and Management, Maritime Economics & Logisticsなど。分析手法に関する参考書は都度紹介する。		
科目のキーワード	国際交通、海運経済、港湾経済、グローバル・ロジスティクス		
授業の特徴	国際交通に関連する研究テーマを設定して、それに関する知識を修得するとともに、課題に関しては、特別研究Ⅱに引き続き、研究計画を立案し実施する。		
関連科目			
履修上の注意等（履修条件等）	ビジネスとガバナンス双方の観点から研究を深めることを期待する。		

カリキュラム区分	科目名		単位数
	特別研究Ⅲ（3年次・通年）		4単位
担当者職・氏名	教授・大塚一徳		
授業概要とテーマ	認知心理学、とくにワーキングメモリ機能の解明およびワーキングメモリ容量個人差が人間の認知過程と認知的加齢に及ぼす影響の解明に向けて、実験および調査を通して研究指導を行う。特別研究Ⅱに引き続き、研究指導教員による継続的な研究指導体制をとり、博士の学位に相応しいレベルの研究論文を完成することができるよう研究指導を行う。また、必要に応じて他領域の教員からの指導を受けながら、研究成果の学会や学術論文への発表などを通して、高度な研究能力の養成を図る。		
到達目標	1) 先行する研究内容を基に立案した研究方法にしたがって、研究を遂行できる。 2) 研究結果を適切に解釈し、研究結果を適切にまとめることができる。 3) 研究結果を学会や学術論文により適切に発表できる。 4) 得られた研究結果の学問的意義を客観的に理解できる。		
授業計画	回	主題	授業内容
	1～2	研究成果のまとめ（1）	得られた研究結果を考察する。
	3～4	研究成果のまとめ（2）	得られた研究結果の学問的意義を考察する。
	5～6	研究の修正・追加（1）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な修正・追加研究を行う。
	7～8	研究の修正・追加（2）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な研究結果の修正を行う。
	9～10	研究の修正・追加（3）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な研究結果の解釈の修正を行う。
	11～12	研究の修正・追加（4）	他領域の教員からの指摘も含めて、最終的な修正・追加研究を行う。
	13～14	プレゼンテーション（1）	学会や学術雑誌での研究成果の発表のため、プレゼンテーションや論文の執筆を行う（原稿の作成）。
	15～16	プレゼンテーション（2）	学会や学術雑誌での研究成果の発表のため、プレゼンテーションや論文の執筆を行う（図表の作成）。
	17～18	博士論文の作成（1）	これまでの成果を博士論文にまとめる（対象と方法）。
	19～20	博士論文の作成（2）	これまでの成果を博士論文にまとめる（結果）。
	21～22	博士論文の作成（3）	これまでの成果を博士論文にまとめる（緒言）。
	23～24	博士論文の作成（4）	これまでの成果を博士論文にまとめる（考察）。
	25～26	博士論文の作成（5）	これまでの成果を博士論文にまとめる（参考文献の検討）。
	27～28	博士論文の作成（6）	これまでの成果を博士論文にまとめる（必要な追加・修正）。
	29～30	総括	研究の総括と、今後の課題について考察する。
	定期試験は実施しない	成績評価については「成績評価の方法」欄参照	
成績評価の基準	A（優）・・・80～100点 B（良）・・・70～79点 C（可）・・・60～69点 D（不可）・・・59点以下		
成績評価の方法	授業に取り組む姿勢と学習内容の理解度から総合的に評価する。		
テキスト	特に設定しない。		
参考文献	必要に応じて学術論文等の文献を事前に指示する。		
科目のキーワード	認知心理学、ワーキングメモリ		
授業の特徴	認知心理学に関連した研究テーマについて課題を設定し、その解決に向けての方策を学ぶため、研究テーマの選択、作業仮説の立案、研究計画の立案、研究の実行方法について習得する。		
関連科目	アカデミックスキル特講、地域創生学特講、地域創生学演習、地域マネジメント特講、特別研究Ⅰ、特別研究Ⅱ		
履修上の注意等（履修条件等）	地域社会マネジメント分野に限らず、情報学や栄養科学の観点も加味した研究テーマの設定を期待する。		

カリキュラム区分	科目名		単位数
	特別研究Ⅲ（3年次・通年）		4単位
担当者職・氏名	教授・宮地晃輔		
授業概要とテーマ	<p>営利組織（営利企業）・非営利組織（行政機関等）のいずれも経営組織体として組織目的の到達（達成）のために会計システムを運用することが必要になる。地域企業・地方自治体においては経営資金や財源に関して選択集中的・戦略的な資源配分の必要度・喫緊度が大都市部（中央）と比較して格段に高く、これを支える会計システム運用に対する高度な研究が必要となっている。</p> <p>組織会計システムは、財務情報及び非財務情報を中心としているが、これらに対する国内外研究動向をふまえたうえで高度な研究能力の養成を図り、博士論文の完成に向けた質の高い研究指導を行う。</p>		
到達目標	<p>①2年間に進捗させた博士論文の執筆内容を検証し、副研究指導教員や他領域からの教員の指摘も加味して、必要な点検及び論文内容の修正を行うことができる。</p> <p>②博士論文の完成にむけて計画的な執筆を進捗させることができる。</p> <p>③学会や学術雑誌での研究成果の発表のため、プレゼンテーション内容や論文内容の整理・討論を行うことができる。</p> <p>④博士論文テーマでの研究成果を解釈し、定められた期限までに博士論文を完成させて提出することができる。</p>		
授業計画	回	主題	授業内容
	1～2	研究の検証	これまでに進捗させた博士論文の執筆内容を検証し、副研究指導教員からの指摘も加味して、必要な点検及び論文内容の修正を行う。
	3～4	研究の実行（15）	博士論文進捗内容の発表と討論を実行する。
	5～6	研究の実行（16）	博士論文進捗内容の発表と討論を実行する。
	7～8	研究の実行（17）	博士論文進捗内容の発表と討論を実行する。
	9～10	研究成果のまとめ（1）	博士論文テーマでの研究成果をまとめ発表・討論する。
	11～12	研究成果のまとめ（2）	博士論文テーマでの研究成果をまとめ発表・討論する。
	13～14	研究の修正・追加（1）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な修正・追加研究を行う。
	15～16	研究の修正・追加（2）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な修正・追加研究を行う。
	17～18	研究の修正・追加（3）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な修正・追加研究を行う。
	19～20	研究の修正・追加（4）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な修正・追加研究を行う。
	21～22	博士論文の学外発表のための内容の整理と討論	学会や学術雑誌での研究成果の発表のため、プレゼンテーション内容や論文内容の整理・討論を行う。
	23～24	研究の実行（18）	博士論文の最終的な完成に向けて、必要な執筆部分に対する討論と論述内容の確認を行う。
	25～26	研究結果の解釈（1）	得られた研究結果を解釈する（定量的または定性的分析の観点から）
	27～28	研究結果の解釈（2）	得られた研究結果を解釈・考察する（先行研究との比較）
29～30	研究結果の解釈（3）	得られた研究結果を解釈・考察する（学問的意義、新規性の観点から）	
		定期試験は実施しない	成績評価については「成績評価の方法」欄参照
成績評価の基準	<p>A（優）・・・80～100点</p> <p>B（良）・・・70～79点</p> <p>C（可）・・・60～69点</p> <p>D（不可）・・・59点以下</p>		
成績評価の方法	<p>① 平常点（授業計画における発表・討論の準備・発表内容・研究成果） 20点</p> <p>② 学会や学術雑誌での博士論文の研究進捗成果の発表・・・ 20点</p> <p>③ 博士論文の進捗状況（計画的執筆の進捗度、論文水準の達成度）・・・ 60点</p>		
テキスト	<p>①伊藤邦雄『新・現代会計入門 第4版』日本経済新聞出版社、2020年。</p> <p>②櫻井通晴『管理会計【第七版】』同文館出版、2019年。</p>		
参考文献	<p>①黒川行治『慶應義塾大学商学会 商学研究叢書 21 会計と社会 一公共会計学論考』慶應義塾大学商学会、2017年。</p> <p>②宮地晃輔『日本企業の環境会計—信頼性の確立に向けて—【増補版】』創成社、2005年。</p>		
科目のキーワード	組織会計システム、財務会計、管理会計、公会計、環境会計、地域企業、地域行政機関、博士論文		
授業の特徴	組織会計システム分野における博士論文の完成に向けて、計画的に執筆が進捗できるように指導をする。また、その過程において受講者の博士論文内容について学外の学会や学術雑誌での研究発表を確実に実行できるように配慮する。		
関連科目	アカデミックスキル特講、地域創生学特講、地域創生学演習、特別研究Ⅰ、特別研究Ⅱ		
履修上の注意等（履修条件等）	組織会計システムに関して、財務会計・管理会計・公会計・環境会計といった会計学の各領域を幅広く意識して研究活動を行うことが重要となる。		

カリキュラム区分	科目名		単位数
	特別研究Ⅲ（3年次・通年）		4単位
担当者職・氏名	教授・矢野生子		
授業概要とテーマ	グローバル化がもたらす国内外の経済への影響、特に地方経済への影響について経済理論的見地から研究指導を行う。特別研究Ⅱに引き続き、研究指導教員による継続的な研究指導体制をとり、博士の学位に相応しいレベルの研究論文を完成することができるよう研究指導を行う。また、必要に応じて他領域の教員からの指導を受けながら、研究成果の学会や学術論文への発表などを通して、高度な研究能力の養成を図る。		
到達目標	1) 先行する研究内容を基に立案した研究方法にしたがって、研究を遂行できる。 2) 研究結果を適切に解釈し、研究結果を適切にまとめることができる。 3) 研究結果を学会や学術論文により適切に発表できる。 4) 得られた研究結果の学問的意義を客観的に理解できる。		
授業計画	回	主題	授業内容
	1～2	研究成果のまとめ（1）	得られた研究結果を考察する。
	3～4	研究成果のまとめ（2）	得られた研究結果の学問的意義を考察する。
	5～6	研究の修正・追加（1）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な修正・追加研究を行う。
	7～8	研究の修正・追加（2）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な研究結果の修正を行う。
	9～10	研究の修正・追加（3）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な研究結果の解釈の修正を行う。
	11～12	研究の修正・追加（4）	他領域の教員からの指摘も含めて、最終的な修正・追加研究を行う。
	13～14	プレゼンテーション（1）	学会や学術雑誌での研究成果の発表のため、プレゼンテーションや論文の執筆を行う（原稿の作成）。
	15～16	プレゼンテーション（2）	学会や学術雑誌での研究成果の発表のため、プレゼンテーションや論文の執筆を行う（図表の作成）。
	17～18	博士論文の作成（1）	これまでの成果を博士論文にまとめる（対象と方法）。
	19～20	博士論文の作成（2）	これまでの成果を博士論文にまとめる（結果）。
	21～22	博士論文の作成（3）	これまでの成果を博士論文にまとめる（緒言）。
	23～24	博士論文の作成（4）	これまでの成果を博士論文にまとめる（考察）。
	25～26	博士論文の作成（5）	これまでの成果を博士論文にまとめる（参考文献の検討）。
	27～28	博士論文の作成（6）	これまでの成果を博士論文にまとめる（必要な追加・修正）。
	29～30	総括	研究の総括と、今後の課題について考察する。
		定期試験は実施しない	成績評価については「成績評価の方法」欄参照
成績評価の基準	A（優）・・・80～100点 B（良）・・・70～79点 C（可）・・・60～69点 D（不可）・・・59点以下		
成績評価の方法	ディスカッションや報告状況など授業に取り組む姿勢と学習内容の理解度（報告やレポートの内容）から総合的に評価する。 ・ディスカッションと報告状況 50% ・学習内容の理解度（報告やレポートの内容）50%		
テキスト	特に設定しない。		
参考文献	藤田昌久，ポール・クルーグマン，アンソニー・J. ベナブルズ 著、『空間経済学—都市・地域・国際貿易の新しい分析』，東洋経済新報社，2007 Joseph Stiglitz and Andrew Charlton, "Fair Trade For All : How Trade Can Promote Development", Oxford University Press, 2005 Joseph Stiglitz, 鈴木主税訳『世界を不幸にしたグローバリズムの正体』，徳間書房書店，2002 その他、各自必要に応じて適切な参考書を選択すること。		
科目のキーワード	グローバル経済、自由貿易、グローバル経済		
授業の特徴	グローバル化がもたらす国内外の経済への影響に関連した研究テーマについて課題を設定し、その解決に向けての方策を学ぶため、特別研究Ⅱに引き続き、研究の実行方法、結果の解釈・解析方法、統計処理、考察とまとめ、プレゼンテーションの方法等について習得する。		
関連科目	アカデミックスキル特講、地域創生学特講、地域創生学演習、地域システム特講、地域マネジメント特講		
履修上の注意等（履修条件等）	経済学の分野に限らず、地域社会学や情報学の観点も加味した研究テーマの設定を期待する。		

カリキュラム区分	科目名	単位数	
	特別研究Ⅲ（3年次・通年）	4単位	
担当者職・氏名	教授・萩野 晃		
授業概要とテーマ	大学院生が研究成果の報告と議論を通じて高度な研究能力を身につけられるよう、博士論文の完成に向けた指導を行う。		
到達目標	1) 先行研究の内容をふまえ、独創性のある研究を遂行する。 2) 研究内容を適切に解釈し、研究結果を適切にまとめる。 3) 研究内容を学術論文により適切に発表できる。 4) 研究結果の学問的な意義を理解する。		
授業計画	回	主題	授業内容
	1～2	研究のまとめ①	前年度の研究成果をふまえ、研究テーマを再確認する。
	3～4	研究のまとめ②	大学院生自身が研究の学問的な意義を考える。
	指導	研究の修正・追加①	指導教員との議論の結果をふまえて、研究内容を修正、追加する。
	7～8	研究の修正・追加②	指導教員以外の教員との議論の結果をふまえて、研究内容を修正、追加する。
	9～10	研究の修正・追加③	大学院生自身で研究の論点を整理する。
	11～12	研究の修正・追加④	研究内容の最終的な修正、追加を行う。
	13～14	プレゼンテーション①	研究成果の発表の準備を進める。
	15～16	プレゼンテーション②	研究成果の発表。
	17～18	博士論文の作成①	論文作成の作業を開始する。
	19～20	博士論文の作成②	研究成果を論文にまとめる。
	21～22	博士論文の作成③	論文の内容の確認。
	23～24	博士論文の作成④	参考文献、研究動向の最終確認。
	25～26	博士論文の作成⑤	草稿の加筆、修正。
	27～28	博士論文の作成⑥	論文の最終確認。
29～30	まとめ	論文審査へ向けた準備。	
	定期試験は実施しない。	成績評価は「成績評価の方法」を参照。	
成績評価の基準	A (優)・・・80～100点 B (良)・・・70～79点 C (可)・・・60～69点 D (不可)・・・59点以下		
成績評価の方法	授業に取り組む姿勢、ディスカッション、研究発表の内容に応じて総合的に評価する。		
テキスト	とくに指定しない。		
参考文献	Paul R. Viotti, Mark V. Kauppi, International Relations and World Politics: Security, Wconomy, Identity Third Edition, Upper Saddle River, 2006.		
科目のキーワード	外交、安全保障、紛争、平和		
授業の特徴	大学院生が自身の研究テーマを設定して、論文作成の準備を進める。		
関連科目			
履修上の注意等 (履修条件等)	大学院生自身が責任をもって研究テーマに取り組む。		

カリキュラム区分	科目名	単位数	
	特別研究Ⅲ（3年次・通年）	4単位	
担当者職・氏名	教授・橋本（松本）優花里		
授業概要とテーマ	高次脳機能障害や認知症の評価や支援方法について、認知心理学、神経心理学、臨床心理学の3つの分野にわたる研究指導を行う。特別研究Ⅱに引き続き、研究指導教員による継続的な研究指導体制をとり、博士の学位に相応しいレベルの研究論文を完成することができるよう研究指導を行う。また、必要に応じて他領域の教員からの指導を受けながら、研究成果の学会や学術論文への発表などを通して、高度な研究能力の養成を図る。		
到達目標	1)立案した研究方法にしたがって、研究を遂行できる。 2)研究結果を適切に解釈し、研究結果を適切にまとめることができる。 3)研究結果を学会や学術論文により適切に発表できる。 4)得られた研究結果の学問的意義を客観的に理解できる。 5)得られた成果を博士論文としてまとめることができる。		
授業計画	回	主題	授業内容
	1～2	研究の修正・追加(6)	計画に従い、研究を遂行する（データの分析、結果の解釈）。
	3～4	研究の修正・追加(7)	計画に従い、研究を遂行する（データの分析、結果の解釈）。
	5～6	研究の修正・追加(8)	計画に従い、研究を遂行する（データの分析、結果の解釈）。
	7～8	研究の総括(1)	研究結果をまとめるとともに、他領域の教員からの指導も踏まえ、研究計画の修正や追加の研究を計画する。
	9～10	研究の総括(2)	得られた研究結果の学問的意義を考察する。
	11～12	研究結果の公表(1)	学会や学術雑誌での研究成果の発表のため、プレゼンテーションや論文の執筆を行う（公表先の検討）
	13～14	研究結果の公表(2)	学会や学術雑誌での研究成果の発表のため、プレゼンテーションや論文の執筆を行う（公表先の執筆規定等に沿った内容の作成）
	15～16	研究結果の公表(3)	学会や学術雑誌での研究成果の発表のため、プレゼンテーションや論文の執筆を行う（内容の完成）
	17～18	研究結果の公表(4)	公表による成果に基づいて、博士論文執筆の計画を立てる。
	19～20	博士論文の作成(1)	これまでの成果を博士論文にまとめる（目的）。
	21～22	博士論文の作成(2)	これまでの成果を博士論文にまとめる（方法）。
	23～24	博士論文の作成(3)	これまでの成果を博士論文にまとめる（結果）。
	25～26	博士論文の作成(4)	これまでの成果を博士論文にまとめる（考察）。
27～28	博士論文の作成(5)	これまでの成果を博士論文にまとめる（査読への対応）	
29～30	博士論文の作成(6)	これまでの成果を博士論文にまとめる（論文の完成）。	
成績評価の基準	A(優)・・・80～100点 B(良)・・・70～79点 C(可)・・・60～69点 D(不可)・・・59点以下		
成績評価の方法	授業に取り組む姿勢と学習内容の理解度から総合的に評価する。		
テキスト	特に設定しない。		
参考文献	日本心理学会 執筆・投稿の手引き https://psych.or.jp/manual		
科目のキーワード	認知心理学、神経心理学、臨床心理学、高次脳機能障害、認知症		
授業の特徴	特別研究Ⅱに引き続き、臨床現場が抱えるリアルタイムの課題を掘り起こし、様々な分野の知見を踏まえ、必要に応じて他分野と協力しながら解決に向けて研究を進めていきます。心理学の中にとどまらず、工学との連携など、広い視野を持った学際的な研究になることを望みます。		
関連科目	アカデミックスキル特講、地域創生学特講、地域創生学演習、実践栄養科学特講、特別研究Ⅰ、特別研究Ⅱ		
履修上の注意等 (履修条件等)			

カリキュラム区分	科目名		単位数
	特別研究Ⅲ（3年次・通年）		4単位
担当者職・氏名	教授・車相龍		
授業概要とテーマ	地域計画論、とりわけ地方（非首都地域）の持続可能な発展を目指した場所デザインおよび価値づけの仕組みづくりについて、質的研究を中心とした研究指導を行う。具体的には、特別研究Ⅱに引き続き、研究計画の遂行と研究成果の公表についての指導を行い、一人前の研究者としての自立を目指して学位論文の作成ができる。		
到達目標	1) 研究の完成度を高めるために適切な補完を行うことができる。 2) 研究成果をまとめて学位論文が作成できる。 3) 反証・反論対応を含む研究のロバストネスが高められる。 4) 得られた成果を学会等で公表できる。 5) 研究の妥当性を検証し、今後の研究に生かすことができる。		
授業計画	回	主題	授業内容
	1～2	研究の進捗状況の点検	研究の進捗状況を確認する。
	3～4	研究の補完（1）	必要に応じて追加調査を行う。
	5～6	研究の補完（2）	必要に応じて追加調査を行う。
	7～8	研究の補完（3）	必要に応じて追加調査を行う。
	9～10	研究の補完（4）	必要に応じて追加調査を行う。
	11～12	学位論文の作成（1）	仮序論
	13～14	学位論文の作成（2）	本論：先行研究の考察①
	15～16	学位論文の作成（3）	本論：先行研究の考察②
	17～18	学位論文の作成（4）	本論：理論的枠組み①
	19～20	学位論文の作成（5）	本論：理論的枠組み①
	21～22	学位論文の作成（6）	本論：事象の発見・確認、解釈・読解、証明・説明①
	23～24	学位論文の作成（7）	本論：事象の発見・確認、解釈・読解、証明・説明②
	25～26	学位論文の作成（8）	結論と序論
	27～28	学位論文の作成（9）	脚注・文献など形式的な検討
29～30	研究成果の公表（10）	学会発表の準備	
		定期試験は実施しない	成績評価については「成績評価の方法」欄参照
成績評価の基準	A(優)・・・80～100点 B(良)・・・70～79点 C(可)・・・60～69点 D(不可)・・・59点以下		
成績評価の方法	ルーブリックによる学修到達度の評価（授業計画に基づく進捗状況50%+成就水準50%）		
テキスト	使わない。		
参考文献	サトウタツヤ他『質的研究法マッピング』新曜社、2019 チャールズ テッドリー『混合研究法の基礎：社会・行動科学の量的・質的アプローチの統合』西村書店、2017 ウヴェ・フリック『新版質的研究入門—人間の科学>のための方法論』春秋社、2011		
科目のキーワード	地域計画論、地方、持続可能な発展、場所デザイン、価値づけ、質的研究		
授業の特徴	地域計画論の視座に立った研究遂行能力の修得・向上を目指した実践指向の問答法（dialectic）基盤の対話式授業		
関連科目	アカデミックスキル特講、地域創生学特講、地域創生学演習		
履修上の注意等（履修条件等）	混合研究の場合、量的研究のアプローチについては、あくまでも質的研究の限界を補完する程度にとどめることにする。		

カリキュラム区分	科目名		単位数
	特別研究Ⅲ（3年次・通年）		4単位
担当者職・氏名	教授・松尾晋一		
授業概要とテーマ	研究者・大学教員として、歴史資料や歴史的事象に俯瞰的な視点からの分析や考察及び主体的な課題発見から解決に必要な情報収集・分析し、課題解決に向けた方法の検討を行うことのできる能力を身につけることを目的とする。具体的には日本近世における政治・外交に関する重要な特定の主題や諸課題に関するテーマを取り上げて考察することで、問題の発見方法や文献資料の読解、論の建て方の理解を深め、情報や知識を複眼的かつ論理的に分析し、表現するための知識と能力を高め高度な研究能力の養成を図る。また、大学院生個々の研究計画に対応する指導を中心として、研究課題の設定、研究計画の立案、調査、分析に向けた研究指導を行う。そして、国内外研究動向をふまえたうえで高度な研究能力の養成を図り、博士論文の完成に向けた質の高い研究指導を行う。		
到達目標	①2年間に進捗させた博士論文の執筆内容を検証し、副研究指導教員や他領域からの教員の指摘も加味して、必要な点検及び論文内容の修正を行うことができる。 ②博士論文の完成にむけて計画的な執筆を進捗させることができる。 ③学会や学術雑誌での研究成果の発表のため、プレゼンテーション内容や論文内容の整理・討論を行うことができる。 ④博士論文テーマでの研究成果を解釈し、定められた期限までに博士論文を完成させて提出することができる。		
授業計画	回	主題	授業内容
	1～2	研究の検証	これまでに進捗させた博士論文の執筆内容を検証し、副研究指導教員からの指摘も加味して、必要な点検及び論文内容の修正を行う。
	3～4	研究の実行（15）	博士論文進捗内容の発表と討論を実行する。
	5～6	研究の実行（16）	博士論文進捗内容の発表と討論を実行する。
	7～8	研究の実行（17）	博士論文進捗内容の発表と討論を実行する。
	9～10	研究成果のまとめ（1）	博士論文テーマでの研究成果をまとめ発表・討論する。
	11～12	研究成果のまとめ（2）	博士論文テーマでの研究成果をまとめ発表・討論する。
	13～14	研究の修正・追加（1）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な修正・追加研究を行う。
	15～16	研究の修正・追加（2）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な修正・追加研究を行う。
	17～18	研究の修正・追加（3）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な修正・追加研究を行う。
	19～20	研究の修正・追加（4）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な修正・追加研究を行う。
	21～22	博士論文の学外発表のための内容の整理と討論	学会や学術雑誌での研究成果の発表のため、プレゼンテーション内容や論文内容の整理・討論を行う。
	23～24	研究の実行（18）	博士論文の最終的な完成に向けて、必要な執筆部分に対する討論と論述内容の確認を行う。
	25～26	研究結果の解釈（1）	得られた研究結果を解釈する（定量的または定性的分析の観点から）
	27～28	研究結果の解釈（2）	得られた研究結果を解釈・考察する（先行研究との比較）
	29～30	研究結果の解釈（3）	得られた研究結果を解釈・考察する（学問的意義、新規性の観点から）
		定期試験は実施しない	成績評価については「成績評価の方法」欄参照
成績評価の基準	A（優）・・・80～100点 B（良）・・・70～79点 C（可）・・・60～69点 D（不可）・・・59点以下		
成績評価の方法	平常点（各回における発表・討論の準備・内容・成果）・・・30% 博士論文の完成状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・70%		
テキスト	特に設定しない。		
参考文献	必要に応じて学術論文等の文献を事前に指示する。		
科目のキーワード	日本近世史、政治、対外政策、外交、史料購読、博士論文		
授業の特徴	博士論文の完成に向けて、計画的に執筆が進捗できるように指導をする。また、その過程において受講者の博士論文内容について学外の学会や学術雑誌での研究発表を確実に実行できるように配慮する。		
関連科目	アカデミックスキル特講、地域創生学特講、地域創生学演習、特別研究Ⅰ、特別研究Ⅲ		
履修上の注意等（履修条件等）	積極的に国内外の学会、研究会に参加すること。		

カリキュラム区分	科目名	単位数
	特別研究Ⅲ（3年次・通年）	4単位

担当者職・氏名	准教授・賈 曦		
授業概要とテーマ	国際社会におけるメディアを媒介としたコミュニケーションの課題についてこれまで蓄積されてきたメディアと社会の関係を論ずる概念モデルや理論的な枠組み等を整理発展し現状分析や将来展望への応用を中心とする研究を国際比較の視点も含む定性・定量分析に基づき指導を行う。特別研究Ⅱに引き続き、研究指導教員による継続的な研究指導体制をとり、博士の学位に相応しいレベルの研究論文を完成することができるよう研究指導を行う。また、必要に応じて他領域の教員からの指導を受けながら、研究成果の学会や学術論文への発表などを通して、高度な研究能力の養成を図る。		
到達目標	1) 先行する研究内容を基に立案した研究方法にしたがって、研究を遂行できる。 2) 研究結果を適切に解釈し、研究結果を適切にまとめることができる。 3) 研究結果を学会や学術論文により適切に発表できる。 4) 得られた研究結果の学問的意義を客観的に理解できる。		
授業計画	回	主題	授業内容
	1～2	研究成果のまとめ（1）	得られた研究結果を考察する。
	3～4	研究成果のまとめ（2）	得られた研究結果の学問的意義を考察する。
	5～6	研究の修正・追加（1）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な修正・追加研究を行う。
	7～8	研究の修正・追加（2）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な研究結果の修正を行う。
	9～10	研究の修正・追加（3）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な研究結果の解釈の修正を行う。
	11～12	研究の修正・追加（4）	他領域の教員からの指摘も含めて、最終的な修正・追加研究を行う。
	13～14	プレゼンテーション（1）	学会や学術雑誌での研究成果の発表のため、プレゼンテーションや論文の執筆を行う（原稿の作成）。
	15～16	プレゼンテーション（2）	学会や学術雑誌での研究成果の発表のため、プレゼンテーションや論文の執筆を行う（図表の作成）。
	17～18	博士論文の作成（1）	これまでの成果を博士論文にまとめる（対象と方法）。
	19～20	博士論文の作成（2）	これまでの成果を博士論文にまとめる（結果）。
	21～22	博士論文の作成（3）	これまでの成果を博士論文にまとめる（緒言）。
	23～24	博士論文の作成（4）	これまでの成果を博士論文にまとめる（考察）。
	25～26	博士論文の作成（5）	これまでの成果を博士論文にまとめる（参考文献の検討）。
	27～28	博士論文の作成（6）	これまでの成果を博士論文にまとめる（必要な追加・修正）。
	29～30	総括	研究の総括と、今後の課題について考察する。
	定期試験は実施しない	成績評価については「成績評価の方法」欄参照	
成績評価の基準	A(優)・・・80～100点 B(良)・・・70～79点 C(可)・・・60～69点 D(不可)・・・59点以下		
成績評価の方法	レポート50%、発表50%。博士論文に向けた研究活動への取り組みも重視して評価を行う。		
テキスト	特に設定しない。		
参考文献	James Curran, Michael Gurevitch (2005) Mass Media and Society, Bloomsbury USA Academic Daniel Riffe, Stephen Lacy, Frederick Fico, Brendan Watson(2019), Analyzing Media Messages, Routledge Communication. その他、各自必要に応じて適切な参考書を選択すること。		
科目のキーワード	メディアと社会、国際比較、質的研究		
授業の特徴	国際社会におけるメディアを媒介としたコミュニケーションに関連した研究テーマについて課題を設定し、その解決に向けての方策を学ぶため、特別研究Ⅱに引き続き、研究の実行方法、結果の解釈・解析方法、考察とまとめ、プレゼンテーションの方法等について習得する。		
関連科目	アカデミックスキル特講、地域創生学特講、地域創生学演習、地域システム特講、地域マネジメント特講、特別研究Ⅰ、特別研究Ⅱ		
履修上の注意等 (履修条件等)	地域社会マネジメント分野に限らず、人間栄養健康科学分野や地域情報工学分野の観点も加味した研究テーマの設定を期待する。		

カリキュラム区分	科目名		単位数
	特別研究Ⅲ（3年次・通年）		4単位
担当者職・氏名	教授・ソムチャイ チャットウィチエンチャイ		
授業概要とテーマ	構造化・半構造化データを効率的に行える横断検索手法の開発を目指し、その手法の提案・実装・検証を通して研究指導を行う。特別研究Ⅱに引き続き、研究指導教員による継続的な研究指導体制をとり、博士の学位に相応しいレベルの研究論文を完成することができるよう研究指導を行う。また、必要に応じて他領域の教員からの指導を受けながら、研究成果の学会や学術論文への発表などを通して、高度な研究能力の養成を図る。		
到達目標	1) 先行する研究内容を基に立案した研究方法にしたがって、研究を遂行できる。 2) 研究結果を適切に解釈し、研究結果を適切にまとめることができる。 3) 研究結果を学会や学術論文により適切に発表できる。 4) 得られた研究結果の学問的意義を客観的に理解できる。		
授業計画	回	主題	授業内容
	1～2	研究成果のまとめ（1）	得られた研究結果を考察する。
	3～4	研究成果のまとめ（2）	得られた研究結果の学問的意義を考察する。
	5～6	研究の修正・追加（1）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な修正・追加研究を行う。
	7～8	研究の修正・追加（2）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な研究結果の修正を行う。
	9～10	研究の修正・追加（3）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な研究結果の解釈の修正を行う。
	11～12	研究の修正・追加（4）	他領域の教員からの指摘も含めて、最終的な修正・追加研究を行う。
	13～14	プレゼンテーション（1）	学会や学術雑誌での研究成果の発表のため、プレゼンテーションや論文の執筆を行う（原稿の作成）。
	15～16	プレゼンテーション（2）	学会や学術雑誌での研究成果の発表のため、プレゼンテーションや論文の執筆を行う（図表の作成）。
	17～18	博士論文の作成（1）	これまでの成果を博士論文にまとめる（対象と方法）。
	19～20	博士論文の作成（2）	これまでの成果を博士論文にまとめる（結果）。
	21～22	博士論文の作成（3）	これまでの成果を博士論文にまとめる（緒言）。
	23～24	博士論文の作成（4）	これまでの成果を博士論文にまとめる（考察）。
	25～26	博士論文の作成（5）	これまでの成果を博士論文にまとめる（参考文献の検討）。
	27～28	博士論文の作成（6）	これまでの成果を博士論文にまとめる（必要な追加・修正）。
	29～30	総括	研究の総括と、今後の課題について考察する。
		定期試験は実施しない	成績評価については「成績評価の方法」欄参照
成績評価の基準	A(優)・・・80～100点 B(良)・・・70～79点 C(可)・・・60～69点 D(不可)・・・59点以下		
成績評価の方法	授業に取り組む姿勢と学習内容の理解度から総合的に評価する。		
テキスト	特に設定しない。		
参考文献	1. Szymański J, et al: Semantic Keyword-Based Search on Structured Data Sources (Lecture Notes in Computer Science), 2018. 2. Walmsley P: XQuery: Search Across a Variety of XML Data, O'Reilly Media, 2016. その他、各自必要に応じて適切な参考書を選択すること。		
科目のキーワード	データベース、SQL、NoSQL、XML、文書、検索		
授業の特徴	構造化データや半構造化データの検索手法に関連した研究テーマについて課題を設定し、その解決に向けての方策を学ぶため、研究テーマの選択、作業仮説の立案、研究計画の立案、研究の実行方法について習得する。		
関連科目	アカデミックスキル特講、地域創生学特講、地域創生学演習、人間情報科学特講		
履修上の注意等 (履修条件等)	情報科学分野に限らず、地域社会学や情報学の観点も加味した研究テーマの設定を期待する。		

カリキュラム区分	科目名		単位数
	特別研究Ⅲ（3年次・通年）		4単位
担当者職・氏名	教授・小林信博		
授業概要とテーマ	情報工学分野、とくに現実世界とサイバー空間の融合する領域における制御システム、制御機器、利用者等に対するサイバー攻撃手法の解明および正常動作の維持・確保に寄与する制御システムセキュリティ技術の開発を目指して、安全性評価実験および検証実験を通して研究指導を行う。特別研究Ⅱに引き続き、研究指導教員による継続的な研究指導体制をとり、博士の学位に相応しいレベルの研究論文を完成することができるよう研究指導を行う。また、必要に応じて他領域の教員からの指導を受けながら、研究成果の学会や学術論文への発表などを通して、高度な研究能力の養成を図る。		
到達目標	1) 先行する研究内容を基に立案した研究方法にしたがって、研究を遂行できる。 2) 研究結果を適切に解釈し、研究結果を適切にまとめることができる。 3) 研究結果を学会や学術論文により適切に発表できる。 4) 得られた研究結果の学問的意義を客観的に理解できる。		
授業計画	回	主題	授業内容
	1～2	研究成果のまとめ（1）	得られた研究結果を考察する。
	3～4	研究成果のまとめ（2）	得られた研究結果の学問的意義を考察する。
	5～6	研究の修正・追加（1）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な修正・追加研究を行う。
	7～8	研究の修正・追加（2）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な研究結果の修正を行う。
	9～10	研究の修正・追加（3）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な研究結果の解釈の修正を行う。
	11～12	研究の修正・追加（4）	他領域の教員からの指摘も含めて、最終的な修正・追加研究を行う。
	13～14	プレゼンテーション（1）	学会や学術雑誌での研究成果の発表のため、プレゼンテーションや論文の執筆を行う（原稿の作成）。
	15～16	プレゼンテーション（2）	学会や学術雑誌での研究成果の発表のため、プレゼンテーションや論文の執筆を行う（図表の作成）。
	17～18	博士論文の作成（1）	これまでの成果を博士論文にまとめる（対象と方法）。
	19～20	博士論文の作成（2）	これまでの成果を博士論文にまとめる（結果）。
	21～22	博士論文の作成（3）	これまでの成果を博士論文にまとめる（緒言）。
	23～24	博士論文の作成（4）	これまでの成果を博士論文にまとめる（考察）。
	25～26	博士論文の作成（5）	これまでの成果を博士論文にまとめる（参考文献の検討）。
	27～28	博士論文の作成（6）	これまでの成果を博士論文にまとめる（必要な追加・修正）。
	29～30	総括	研究の総括と、今後の課題について考察する。
	定期試験は実施しない	成績評価については「成績評価の方法」欄参照	
成績評価の基準	A（優）・・・80～100点 B（良）・・・70～79点 C（可）・・・60～69点 D（不可）・・・59点以下		
成績評価の方法	授業に取り組む姿勢（ディスカッション20%）と学習内容の理解度（博士論文の状況80%）から総合的に評価する。		
テキスト	特に設定しない。		
参考文献	各自必要に応じて適切な参考書を選択。		
科目のキーワード	情報セキュリティ、通信・ネットワーク工学、制御システムセキュリティ、組込みシステムセキュリティ、CPS		
授業の特徴	制御システムセキュリティに関連した研究テーマについて課題を設定し、その解決に向けての方策を学ぶため、特別研究Ⅱに引き続き、研究の実行方法、研究結果の解釈・考察の方法とまとめ、プレゼンテーションの方法等について習得する。		
関連科目	アカデミックスキル特講、情報セキュリティ特講、特別研究Ⅰ、特別研究Ⅱ		
履修上の注意等（履修条件等）	『暗号技術』『コンピュータネットワーク技術』について一般的な知識を習得済みで、ITとOTの双方に興味のあることが望ましい。地域創生の観点も加味した研究成果を期待する。		

カリキュラム区分	科目名		単位数
	特別研究Ⅲ（3年次・通年）		4単位
担当者職・氏名	教授・吉村元秀		
授業概要とテーマ	まちづくり工学に関する研究を通して研究指導を行う。特別研究Ⅱに引き続き、特別研究Ⅰに引き続き、研究指導教員による継続的な研究指導体制をとり、博士の学位に相応しいレベルの研究論文を完成することができるよう研究を指導する。必要に応じて他領域の教員からの指導を受けながら、研究成果の学会発表や学術論文投稿を通して、高度な研究展開能力養成する。		
到達目標	1) 先行する研究内容を基に立案した研究方法にしたがって、研究を遂行できる。 2) 研究結果を適切に評価し、研究成果として論理的にまとめることができる。 3) 研究成果を学会や学術論文において明解に発表できる。 4) 得られた研究成果の学問的意義を客観的に説明できる。		
授業計画	回	主題	授業内容
	1～2	研究成果のまとめ（1）	得られた研究結果を考察する。
	3～4	研究成果のまとめ（2）	得られた研究結果の学問的意義を考察する。
	5～6	研究の修正・追加（1）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な修正・追加研究を行う。
	7～8	研究の修正・追加（2）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な研究結果の修正を行う。
	9～10	研究の修正・追加（3）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な研究結果の解釈の修正を行う。
	11～12	研究の修正・追加（4）	他領域の教員からの指摘も含めて、最終的な修正・追加研究を行う。
	13～14	プレゼンテーション（1）	学会や学術雑誌での研究成果の発表のため、プレゼンテーションや論文の執筆を行う（原稿の作成）。
	15～16	プレゼンテーション（2）	学会や学術雑誌での研究成果の発表のため、プレゼンテーションや論文の執筆を行う（図表の作成）。
	17～18	博士論文の作成（1）	これまでの成果を博士論文にまとめる（対象と方法）。
	19～20	博士論文の作成（2）	これまでの成果を博士論文にまとめる（結果）。
	21～22	博士論文の作成（3）	これまでの成果を博士論文にまとめる（緒言）。
	23～24	博士論文の作成（4）	これまでの成果を博士論文にまとめる（考察）。
	25～26	博士論文の作成（5）	これまでの成果を博士論文にまとめる（参考文献の検討）。
	27～28	博士論文の作成（6）	これまでの成果を博士論文にまとめる（必要な追加・修正）。
	29～30	総括	研究の総括と、今後の課題について考察する。
		定期試験は実施しない	成績評価については「成績評価の方法」欄参照
成績評価の基準	A（優）・・・80～100点 B（良）・・・70～79点 C（可）・・・60～69点 D（不可）・・・59点以下		
成績評価の方法	授業に取り組む姿勢と学習内容の理解度から総合的に評価する。レポート50%、発表50%にて評価をする。		
テキスト	必要に応じて資料を配布する。		
参考文献	必要に応じて学術論文等の文献を事前に指示する。		
科目のキーワード	観光学、社会工学、システム科学、認知科学、心理学、情報工学		
授業の特徴	打ち合わせを重ねながら、研究を遂行する。		
関連科目	アカデミックスキル特講、地域創生学特講、地域創生学演習、人間情報科学特講、特別研究Ⅱ		
履修上の注意等（履修条件等）			

カリキュラム区分	科目名		単位数
	特別研究Ⅲ（3年次・通年）		4単位
担当者職・氏名	教授・片山徹也		
授業概要とテーマ	情報デザイン領域におけるコンテンツのユーザビリティ及びアクセシビリティの向上に寄与するデザイン手法の開発を目指して、現況調査あるいは被験者実験等を通して研究指導を行う。特別研究Ⅱに引き続き、研究指導教員による継続的な研究指導体制をとり、博士の学位に相応しいレベルの研究論文を完成することができるよう研究指導を行う。また、必要に応じて他領域の教員からの指導を受けながら、研究成果の学会や学術論文への発表などを通して、高度な研究能力の養成を図る。		
到達目標	1) 先行する研究内容を基に立案した研究方法にしたがって、研究を遂行できる。 2) 研究結果を適切に解釈し、研究結果を適切にまとめることができる。 3) 研究結果を学会や学術論文により適切に発表できる。 4) 得られた研究結果の学問的意義を客観的に理解できる。		
授業計画	回	主題	授業内容
	1～2	研究成果のまとめ（1）	得られた研究結果を考察する。
	3～4	研究成果のまとめ（2）	得られた研究結果の学問的意義を考察する。
	5～6	研究の修正・追加（1）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な修正・追加研究を行う。
	7～8	研究の修正・追加（2）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な研究結果の修正を行う。
	9～10	研究の修正・追加（3）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な研究結果の解釈の修正を行う。
	11～12	研究の修正・追加（4）	他領域の教員からの指摘も含めて、最終的な修正・追加研究を行う。
	13～14	プレゼンテーション（1）	学会や学術雑誌での研究成果の発表のため、プレゼンテーションや論文の執筆を行う（原稿の作成）。
	15～16	プレゼンテーション（2）	学会や学術雑誌での研究成果の発表のため、プレゼンテーションや論文の執筆を行う（図表の作成）。
	17～18	博士論文の作成（1）	これまでの成果を博士論文にまとめる（対象と方法）。
	19～20	博士論文の作成（2）	これまでの成果を博士論文にまとめる（結果）。
	21～22	博士論文の作成（3）	これまでの成果を博士論文にまとめる（緒言）。
	23～24	博士論文の作成（4）	これまでの成果を博士論文にまとめる（考察）。
	25～26	博士論文の作成（5）	これまでの成果を博士論文にまとめる（参考文献の検討）。
	27～28	博士論文の作成（6）	これまでの成果を博士論文にまとめる（必要な追加・修正）。
29～30	総括	研究の総括と、今後の課題について考察する。	
		定期試験は実施しない	成績評価については「成績評価の方法」欄参照
成績評価の基準	A（優）・・・80～100点 B（良）・・・70～79点 C（可）・・・60～69点 D（不可）・・・59点以下		
成績評価の方法	研究に係るレジュメやスライド等の作成資料、授業時のディスカッションの状況等の学習態度及び最終成果物（博士論文）より総合的に評価する。提出物及び学習態度20%、博士論文80%		
テキスト	特に設定しない。		
参考文献	研究計画の進捗に応じて専門書、学術論文等の文献を事前に指示する。		
科目のキーワード	情報デザイン、人間中心設定、ユーザビリティ、アクセシビリティ		
授業の特徴	情報デザイン領域に関連した研究テーマについて課題を設定し、その解決に向けての方策を学ぶため、特別研究Ⅱに引き続き、研究の実行方法、結果の解釈・解析方法、統計処理、考察とまとめ、プレゼンテーションの方法等について習得する。		
関連科目	アカデミックスキル特講、特別研究Ⅰ、特別研究Ⅱ		
履修上の注意等（履修条件等）	履修条件は特に設けない。		

カリキュラム区分	科目名		単位数
	特別研究Ⅲ（3年次・通年）		4単位
担当者職・氏名	教授・星野 文学		
授業概要とテーマ	情報セキュリティ、特に暗号設計学および暗号解析学、の学問的発展への貢献を目指して、理論研究あるいは計算機実験を通して研究指導を行う。特別研究Ⅱに引き続き、研究指導教員による継続的な研究指導体制をとり、博士の学位に相応しいレベルの研究論文を完成することができるよう研究指導を行う。また、必要に応じて他領域の教員からの指導を受けながら、研究成果の学会や学術論文への発表などを通して、高度な研究能力の養成を図る。		
到達目標	1) 先行する研究内容を基に立案した研究方法にしたがって、研究を遂行できる。 2) 研究結果を適切に解釈し、研究結果を適切にまとめることができる。 3) 研究結果を学会や学術論文により適切に発表できる。 4) 得られた研究結果の学問的意義を客観的に理解できる。		
授業計画	回	主題	授業内容
	1～2	研究成果のまとめ（1）	得られた研究結果を考察する。
	3～4	研究成果のまとめ（2）	得られた研究結果の学問的意義を考察する。
	5～6	研究の修正・追加（1）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な修正・追加研究を行う。
	7～8	研究の修正・追加（2）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な研究結果の修正を行う。
	9～10	研究の修正・追加（3）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な研究結果の解釈の修正を行う。
	11～12	研究の修正・追加（4）	他領域の教員からの指摘も含めて、最終的な修正・追加研究を行う。
	13～14	プレゼンテーション（1）	学会や学術雑誌での研究成果の発表のため、プレゼンテーションや論文の執筆を行う（原稿の作成）。
	15～16	プレゼンテーション（2）	学会や学術雑誌での研究成果の発表のため、プレゼンテーションや論文の執筆を行う（図表の作成）。
	17～18	博士論文の作成（1）	これまでの成果を博士論文にまとめる（対象と方法）。
	19～20	博士論文の作成（2）	これまでの成果を博士論文にまとめる（結果）。
	21～22	博士論文の作成（3）	これまでの成果を博士論文にまとめる（緒言）。
	23～24	博士論文の作成（4）	これまでの成果を博士論文にまとめる（考察）。
	25～26	博士論文の作成（5）	これまでの成果を博士論文にまとめる（参考文献の検討）。
	27～28	博士論文の作成（6）	これまでの成果を博士論文にまとめる（必要な追加・修正）。
	29～30	総括	研究の総括と、今後の課題について考察する。
		定期試験は実施しない	成績評価については「成績評価の方法」欄参照
成績評価の基準	A(優)・・・80～100点 B(良)・・・70～79点 C(可)・・・60～69点 D(不可)・・・59点以下		
成績評価の方法	授業に取り組む姿勢（ディスカッション20%）と作成論文の状況（80%）から総合的に評価する。		
テキスト	特に設定しない。		
参考文献	岡本 龍明：現代暗号の誕生と発展，近代科学社，2019 Lindell Y(Ed)：Tutorials on the Foundations of Cryptography, Springer, 2017 Joux A: Algorithmic Cryptanalysis, CRC Press, 2009 その他、各自必要に応じて適切な参考書を選択すること。		
科目のキーワード	情報セキュリティ、暗号設計学、暗号解析学		
授業の特徴	暗号学に関連した研究テーマについて課題を設定し、その解決に向けての方策を学ぶため、特別研究Ⅱに引き続き、研究の実行方法、結果の解釈・解析方法、考察とまとめ、プレゼンテーションの方法等について習得する。		
関連科目	アカデミックスキル特講、情報セキュリティ特講、特別研究Ⅰ、特別研究Ⅱ		
履修上の注意等 （履修条件等）	暗号学分野に限らず、情報学や計算機科学の観点も加味した研究テーマの設定を期待する。		

カリキュラム区分	科目名		単位数
	特別研究Ⅲ（3年次・通年）		4単位
担当者職・氏名	教授・島 成佳		
授業概要とテーマ	<p>情報通信技術（ICT）を利用するシステムを対象として、日々変化するサイバー攻撃に対抗する技術・制度・人を考慮したセキュリティ対策の創出において、特別研究Ⅱにて得られたセキュリティデザイン、セキュリティアーキテクチャ、セキュリティ運用に関わるセキュリティ技術の研究結果の遂行結果をまとめて、学会発表、学術論文投稿によって専門分野の研究者の評価を受けて研究の遂行結果を再検証をし、必要に応じ追加の研究を行い、その成果の学会発表、学術論文投稿を通して学位論文の完成に向けた研究指導を行う。</p> <p>特別研究Ⅱに引き続き、研究指導教員による継続的な研究指導体制をとり、博士の学位に相応しいレベルの研究論文を完成することができるよう研究指導を行う。また、必要に応じて外部組織の有識者や他領域の教員からの指導を受けながら、研究成果の学会や学術論文への発表などを通して、高度な研究能力の養成を図る。</p>		
到達目標	<p>1) 先行する研究内容を基に立案した研究方法にしたがって、研究を遂行できる。</p> <p>2) 研究結果を適切に解釈し、研究結果を適切にまとめることができる。</p> <p>3) 研究結果を学会や学術論文により適切に発表できる。</p> <p>4) 得られた研究結果の学問的意義を客観的に理解できる。</p>		
授業計画	回	主題	授業内容
	1～2	研究成果のまとめ（1）	得られた研究結果の学術的な意義を考察する。
	3～4	研究成果のまとめ（2）	得られた研究結果の実用的な意義を考察する。
	5～6	プレゼンテーション（1）	学会や学術雑誌での研究成果の発表のため、論文執筆とプレゼンテーション作成を行う。
	7～8	プレゼンテーション（2）	学会や学術雑誌での研究成果の発表のため、論文執筆とプレゼンテーション作成を行う。
	9～10	研究の修正・追加（1）	外部組織の有識者や他領域の教員からの指摘も含めて、必要な修正・追加研究を行う。
	11～12	研究の修正・追加（2）	外部組織の有識者や他領域の教員からの指摘も含めて、必要な研究結果の修正を行う。
	13～14	研究の修正・追加（3）	外部組織の有識者や他領域の教員からの指摘も含めて、必要な研究結果の解釈の修正を行う。
	15～16	研究の修正・追加（4）	外部組織の有識者や他領域の教員からの指摘も含めて、最終的な修正・追加研究を行う。
	17～18	博士論文の作成（1）	これまでの成果を博士論文にまとめる（背景と課題）。
	19～20	博士論文の作成（2）	これまでの成果を博士論文にまとめる（解決手法）。
	21～22	博士論文の作成（3）	これまでの成果を博士論文にまとめる（検証・評価結果）。
	23～24	博士論文の作成（4）	これまでの成果を博士論文にまとめる（考察）。
	25～26	博士論文の作成（5）	これまでの成果を博士論文にまとめる（参考文献の検討）。
	27～28	博士論文の作成（6）	これまでの成果を博士論文にまとめる（必要な追加・修正）。
	29～30	総括	研究の総括と、今後の課題について考察する。
	定期試験は実施しない	成績評価については「成績評価の方法」欄参照	
成績評価の基準	<p>A（優）・・・80～100点</p> <p>B（良）・・・70～79点</p> <p>C（可）・・・60～69点</p> <p>D（不可）・・・59点以下</p>		
成績評価の方法	授業に取り組む姿勢（ディスカッション20%）と作成論文の状況（80%）から総合的に評価する。		
テキスト	特に設定しない。		
参考文献	<ul style="list-style-type: none"> ・独立行政法人情報処理推進機構（IPA）：情報セキュリティ白書，IPA，（過去3年分） ・National Institute of Standards and Technology（NIST）：Framework for Improving Critical Infrastructure Cybersecurity Version 1.1，NIST，2018. ・独立行政法人情報処理推進機構（IPA）：セキュリティ・バイ・デザイン 導入指南書，IPA，2022. ・Jason T. Luttgens（著），Matthew Pepe（著），政元 憲蔵（監訳），凌 翔太（監訳），山崎 剛弥（監訳）：インシデントレスポンス第3版（Japanese），日経BP，2016. ・日本セキュリティオペレーション事業者協議会（ISOG-J）：セキュリティ対応組織（SOC/CSIRT）の教科書 第2.0版，ISOG-J，2017. <p>その他、各自必要に応じて適切な参考文献を選択すること。</p>		
科目のキーワード	サイバーセキュリティ、セキュリティバイデザイン、セキュリティアーキテクチャ、セキュリティ運用、インシデントレスポンス		

授 業 の 特 徴	サイバーセキュリティに関連した研究テーマについて課題を設定し、その解決に向けての方策を学ぶため、特別研究Ⅱに引き続き、研究の実行方法、結果の解釈・解析方法、有効性検証方法、考察とまとめ、プレゼンテーション及び論文執筆の方法等について習得する。
関 連 科 目	アカデミックスキル特講、情報セキュリティ特講、特別研究Ⅰ、特別研究Ⅱ
履修上の注意等 (履修条件等)	サイバー攻撃対策の立案では情報システムやサービスのみでなく、組織の事業内容や制度(事業継続計画等)も関係するため、情報セキュリティや企業マネジメントの観点も加味した研究課題の設定を期待する。サイバーセキュリティでは、現場からの知見を研究に活かすことで、より有用性や実効性の高い成果を生み出せるため、外部組織(公的機関やセキュリティベンダー等)との連携した研究を推奨する。

カリキュラム区分	科目名		単位数
	特別研究Ⅲ（3年次・通年）		4単位
担当者職・氏名	教授・平岡透		
授業概要とテーマ	画像工学や空間情報工学の技術を基にした地域防災や地域活性化、ノンフォトリアリスティックレンダリングなどに関する研究を通して研究指導を行う。特別研究Ⅱに引き続き、研究指導教員による継続的な研究指導体制をとり、博士の学位に相応しいレベルの研究論文を完成することができるよう研究指導を行う。また、必要に応じて他領域の教員からの指導を受けながら、研究成果の学会や学術論文への発表などを通して、高度な研究能力の養成を図る。		
到達目標	1) 先行する研究内容を基に立案した研究方法にしたがって、研究を遂行できる。 2) 研究結果を適切に解釈し、研究結果を適切にまとめることができる。 3) 研究結果を学会や学術論文により適切に発表できる。 4) 得られた研究結果の学問的意義を客観的に理解できる。		
授業計画	回	主題	授業内容
	1～2	研究成果のまとめ（1）	得られた研究結果を考察する。
	3～4	研究成果のまとめ（2）	得られた研究結果の学問的意義を考察する。
	5～6	研究の修正・追加（1）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な修正・追加研究を行う。
	7～8	研究の修正・追加（2）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な研究結果の修正を行う。
	9～10	研究の修正・追加（3）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な研究結果の解釈の修正を行う。
	11～12	研究の修正・追加（4）	他領域の教員からの指摘も含めて、最終的な修正・追加研究を行う。
	13～14	プレゼンテーション（1）	学会や学術雑誌での研究成果の発表のため、プレゼンテーションや論文の執筆を行う（原稿の作成）。
	15～16	プレゼンテーション（2）	学会や学術雑誌での研究成果の発表のため、プレゼンテーションや論文の執筆を行う（図表の作成）。
	17～18	博士論文の作成（1）	これまでの成果を博士論文にまとめる（対象と方法）。
	19～20	博士論文の作成（2）	これまでの成果を博士論文にまとめる（結果）。
	21～22	博士論文の作成（3）	これまでの成果を博士論文にまとめる（緒言）。
	23～24	博士論文の作成（4）	これまでの成果を博士論文にまとめる（考察）。
	25～26	博士論文の作成（5）	これまでの成果を博士論文にまとめる（参考文献の検討）。
	27～28	博士論文の作成（6）	これまでの成果を博士論文にまとめる（必要な追加・修正）。
29～30	総括	研究の総括と、今後の課題について考察する。	
	定期試験は実施しない	成績評価については「成績評価の方法」欄参照	
成績評価の基準	A（優）・・・80～100点 B（良）・・・70～79点 C（可）・・・60～69点 D（不可）・・・59点以下		
成績評価の方法	博士論文80%、授業態度（ディスカッションや発表状況）20%		
テキスト	必要に応じてプリントを配布する。		
参考文献	必要に応じて学術論文などの文献を事前に指示する。		
科目のキーワード	画像工学、空間情報工学、地域防災、地域活性化、ノンフォトリアリスティックレンダリング		
授業の特徴	特別研究Ⅱに引き続き、個別打ち合わせを重ねながら、終始論文のための実験・分析を進めてもらう。		
関連科目	アカデミックスキル特講、地域創生学特講、地域創生学演習、人間情報科学特講、特別研究Ⅱ		
履修上の注意等（履修条件等）			

カリキュラム区分	科目名		単位数
	特別研究Ⅲ（3年次・通年）		4単位
担当者職・氏名	准教授・斎藤正也		
授業概要とテーマ	時系列解析手法、ベイズ統計を用いた情報システムの記述および解析に関する研究指導を行う。特別研究Ⅱに引き続き、研究指導教員による継続的な指導のもと、研究課題の設定、課題解決に必要な知識・技術を文献および実践を通じて修得させ、研究者としての基本的な資質を養う。学会発表、原著論文の発表を通して学術的成果の外化能力を養うとともに、時系列解析や当該学術領域の研究史のなかに自らの成果を位置づけ、博士の学位に相応しい水準の研究論文作成を完成させることができるよう研究指導を行う。また、必要に応じて他領域の教員からの指導を受け、幅広い研究領域を有機的に統合しながら質の高い研究指導を行う。		
到達目標	1) 先行する研究内容を基に立案した研究方法にしたがって、研究を遂行できる。 2) 研究結果を適切に解釈し、研究結果を適切にまとめることができる。 3) 研究結果を学会や学術論文により適切に発表できる。 4) 学会発表や学術論文発表した知見と既存の知見とを統合して、博士論文として一連の学術的成果を構造的にまとめることができる。		
授業計画	回	主題	授業内容
	1～2	研究成果のまとめ（1）	得られた研究結果を考察する。
	3～4	研究成果のまとめ（2）	得られた研究結果の学問的意義を考察する。
	5～6	研究の修正・追加（1）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な修正・追加研究を行う。
	7～8	研究の修正・追加（2）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な研究結果の修正を行う。
	9～10	研究の修正・追加（3）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な研究結果の解釈の修正を行う。
	11～12	研究の修正・追加（4）	他領域の教員からの指摘も含めて、最終的な修正・追加研究を行う。
	13～14	プレゼンテーション（1）	学会や学術雑誌での研究成果の発表のため、プレゼンテーションや論文の執筆を行う（原稿の作成）。
	15～16	プレゼンテーション（2）	学会や学術雑誌での研究成果の発表のため、プレゼンテーションや論文の執筆を行う（図表の作成）。
	17～18	博士論文の作成（1）	これまでの成果を博士論文にまとめる（対象と方法）。
	19～20	博士論文の作成（2）	これまでの成果を博士論文にまとめる（結果）。
	21～22	博士論文の作成（3）	これまでの成果を博士論文にまとめる（緒言）。
	23～24	博士論文の作成（4）	これまでの成果を博士論文にまとめる（考察）。
	25～26	博士論文の作成（5）	これまでの成果を博士論文にまとめる（参考文献の検討）。
	27～28	博士論文の作成（6）	これまでの成果を博士論文にまとめる（必要な追加・修正）。
29～30	総括	研究の総括と、今後の課題について考察する。	
		定期試験は実施しない	成績評価については「成績評価の方法」欄参照
成績評価の基準	A（優）・・・80～100点 B（良）・・・70～79点 C（可）・・・60～69点 D（不可）・・・59点以下		
成績評価の方法	授業に取り組む姿勢と学習内容の理解度から総合的に評価する。		
テキスト	特に設定しない。		
参考文献	樋口知之〔編著〕・データ同化入門、朝倉書店、2011 北川源四郎・時系列解析入門、岩波書店、2005 CMピショップ著・パターン認識と機械学習、2006 この他、授業中に指定する研究課題にかかわる原著論文を参照すること。		
科目のキーワード	時系列解析、データ同化、ベイズ統計、機械学習		
授業の特徴	時系列解析の手法または受講者が関心の学術領域（ドメイン）に関連した研究テーマについて課題を設定し、その解決に向けての方策を学ぶため、特別研究Ⅱに引き続き、研究の実行方法、結果の解釈・解析方法、統計処理、考察とまとめ、プレゼンテーションの方法等について習得する。		
関連科目	アカデミックスキル特講、地域創生学特講、地域創生学演習、情報セキュリティ特講、特別研究Ⅰ、特別研究Ⅱ		
履修上の注意等（履修条件等）	なし		

カリキュラム区分	科目名	単位数	
	特別研究Ⅲ（3年次・通年）	4単位	
担当者職・氏名	教授・大曲勝久		
授業概要とテーマ	臨床栄養学、とくに非アルコール性脂肪肝の発症機序の解明および発症・進展の抑制に寄与する栄養療法の開発を目指して、動物実験および臨床研究を通して研究指導を行う。特別研究Ⅱに引き続き、研究指導教員による継続的な研究指導体制をとり、博士の学位に相応しいレベルの研究論文を完成することができるよう研究指導を行う。特別研究Ⅱで得られた調査・実験結果を再検証し追加調査・研究を行い、また、必要に応じて他領域の教員からの指導を受けながら、研究成果の学会や学術論文への発表などを通して、高度な研究能力の養成を図る。		
到達目標	1) 先行する研究内容を基に立案した研究方法にしたがって、研究を遂行できる。 2) 研究結果を適切に解釈し、研究結果を適切にまとめることができる。 3) 研究結果を学会や学術論文により適切に発表できる。 4) 得られた研究結果の学問的意義を客観的に理解できる。		
授業計画	回	主題	授業内容
	1～2	研究成果のまとめ（1）	得られた研究結果を考察する。
	3～4	研究成果のまとめ（2）	得られた研究結果の学問的意義を考察する。
	5～6	研究の修正・追加（1）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な修正・追加研究を行う。
	7～8	研究の修正・追加（2）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な研究結果の修正を行う。
	9～10	研究の修正・追加（3）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な研究結果の解釈の修正を行う。
	11～12	研究の修正・追加（4）	他領域の教員からの指摘も含めて、最終的な修正・追加研究を行う。
	13～14	プレゼンテーション（1）	学会や学術雑誌での研究成果の発表のため、プレゼンテーションや論文の執筆を行う（原稿の作成）。
	15～16	プレゼンテーション（2）	学会や学術雑誌での研究成果の発表のため、プレゼンテーションや論文の執筆を行う（図表の作成）。
	17～18	博士論文の作成（1）	これまでの成果を博士論文にまとめる（対象と方法）。
	19～20	博士論文の作成（2）	これまでの成果を博士論文にまとめる（結果）。
	21～22	博士論文の作成（3）	これまでの成果を博士論文にまとめる（緒言）。
	23～24	博士論文の作成（4）	これまでの成果を博士論文にまとめる（考察）。
	25～26	博士論文の作成（5）	これまでの成果を博士論文にまとめる（参考文献の検討）。
	27～28	博士論文の作成（6）	これまでの成果を博士論文にまとめる（必要な追加・修正）。
	29～30	総括	研究の総括と、今後の課題について考察する。
	定期試験は実施しない	成績評価については「成績評価の方法」欄参照	
成績評価の基準	A（優）・・・80～100点 B（良）・・・70～79点 C（可）・・・60～69点 D（不可）・・・59点以下		
成績評価の方法	授業に取り組む姿勢と学習内容の理解度から総合的に評価する。		
テキスト	特に設定しない。		
参考文献	Abel T, et al. (Eds): Nonalcoholic Fatty Liver Disease (NAFLD), Bentham Books, 2017 日本消化器病学会・日本肝臓学会（編）：NAFLD/NASH診療ガイドライン2020、南江堂、2020 その他、各自必要に応じて適切な参考書を選択すること。		
科目のキーワード	臨床栄養学、非アルコール性脂肪肝		
授業の特徴	臨床栄養学に関連した研究テーマについて課題を設定し、その解決に向けての方策を学ぶため、特別研究Ⅱに引き続き、研究の実行方法、結果の解釈・解析方法、統計処理、考察とまとめ、プレゼンテーションの方法等について習得する。		
関連科目	アカデミックスキル特講、地域創生学特講、地域創生学演習、実践栄養科学特講、特別研究Ⅰ、特別研究Ⅱ		
履修上の注意等（履修条件等）	栄養科学分野に限らず、地域社会学や情報学の観点も加味した研究成果を期待する。		

カリキュラム区分	科目名	単位数	
	特別研究Ⅲ（3年次・通年）	4単位	
担当者職・氏名	教授・古場一哲		
授業概要とテーマ	食品～食品成分によるメタボリックシンドロームの改善を目指し、脂質代謝調節をキーワードに動物実験を通して食品の機能性およびその作用機序解明に関する研究指導を行う。特別研究Ⅱに引き続き、研究指導教員による継続的な研究指導体制をとり、博士の学位に相応しいレベルの研究論文を完成することができるよう研究指導を行う。また、必要に応じて他領域の教員からの指導を受けながら、研究成果の学会や学術論文への発表などを通して、高度な研究能力の養成を図る。		
到達目標	1) 先行する研究内容を基に立案した研究方法にしたがって、研究を遂行できる。 2) 研究結果を適切に解釈し、研究結果を適切にまとめることができる。 3) 研究結果を学会や学術論文により適切に発表できる。 4) 得られた研究結果の学問的意義を客観的に理解できる。		
授業計画	回	主題	授業内容
	1～2	研究成果のまとめ（1）	得られた研究結果を考察する。
	3～4	研究成果のまとめ（2）	得られた研究結果の学問的意義を考察する。
	5～6	研究の修正・追加（1）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な修正・追加研究を行う。
	7～8	研究の修正・追加（2）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な研究結果の修正を行う。
	9～10	研究の修正・追加（3）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な研究結果の解釈の修正を行う。
	11～12	研究の修正・追加（4）	他領域の教員からの指摘も含めて、最終的な修正・追加研究を行う。
	13～14	プレゼンテーション（1）	学会や学術雑誌での研究成果の発表のため、プレゼンテーションや論文の執筆を行う（原稿の作成）。
	15～16	プレゼンテーション（2）	学会や学術雑誌での研究成果の発表のため、プレゼンテーションや論文の執筆を行う（図表の作成）。
	17～18	博士論文の作成（1）	これまでの成果を博士論文にまとめる（対象と方法）。
	19～20	博士論文の作成（2）	これまでの成果を博士論文にまとめる（結果）。
	21～22	博士論文の作成（3）	これまでの成果を博士論文にまとめる（緒言）。
	23～24	博士論文の作成（4）	これまでの成果を博士論文にまとめる（考察）。
	25～26	博士論文の作成（5）	これまでの成果を博士論文にまとめる（参考文献の検討）。
	27～28	博士論文の作成（6）	これまでの成果を博士論文にまとめる（必要な追加・修正）。
29～30	総括	研究の総括と、今後の課題について考察する。	
		定期試験は実施しない	成績評価については「成績評価の方法」欄参照
成績評価の基準	A（優）・・・80～100点 B（良）・・・70～79点 C（可）・・・60～69点 D（不可）・・・59点以下		
成績評価の方法	授業に取り組む姿勢50%（修正・追加実験の実行状況、学会発表など）および博士論文の完成度50%から総合的に評価する。		
テキスト	特に設定しない。		
参考文献	必要に応じて学術論文等の文献を事前に指示する。		
科目のキーワード	食品、機能性、メタボリックシンドローム、脂質代謝		
授業の特徴	設定した研究テーマの課題解決に向けて、特別研究Ⅱに引き続き、研究の実行方法、結果の解釈・解析方法、統計処理、考察とまとめ、プレゼンテーションの方法等について習得する。		
関連科目	アカデミックスキル特講、地域創生学特講、地域創生学演習、基礎栄養科学特講、特別研究Ⅰ、特別研究Ⅱ		
履修上の注意等（履修条件等）	自身の研究への主体的な取り組みと指導教員との結果についての積極的なディスカッションを心がけてください。		

カリキュラム区分	科目名		単位数
	特別研究Ⅲ（3年次・通年）		4単位
担当者職・氏名	教授 世羅至子		
授業概要とテーマ	特別研究Ⅱに引き続き、糖尿病患者の栄養状態やサルコペニアについて、食事摂取量や運動習慣の有無、糖尿病の病態との関連などを横断的および継続的に調査を行い、これらに影響を及ぼす因子を検討し、糖尿病患者のサルコペニアや低栄養状態の改善に寄与できる研究指導を行う。 特別研究Ⅲでは得られた結果から、博士の学位に相当する内容の論文を作成し、学会発表や、学術論文への投稿も行っていく。論文作成や投稿、学会発表については必要に応じて、糖尿病専門医や他の教員とからも意見をきき、よりよい研究内容に仕上げていく。		
到達目標	1) 先行する研究内容を基に、自ら立案した研究計画に沿って、研究を遂行する。 2) 収集したデータを適切に用いて、解析を行う。 3) 研究結果に関連する学会や学術論文により発表できる。 4) 得られた研究結果の学問的、臨床的意義について客観的に評価できる。		
授業計画	回	主題	授業内容
	1～2	研究結果のまとめ（4）	得られた研究結果について、指導教員の他、糖尿病専門医などの医師や糖尿病療養指導士、他の教員とディスカッションする。
	3～4	研究結果のまとめ（5）	得られた研究結果について、指導教員の他、糖尿病専門医などの医師や糖尿病療養指導士、他の教員とディスカッションする。
	5～6	研究の修正・追加（1）	指摘された部分について、必要なデータの追加収集（必要時は倫理委員会の変更申請を行う）・解析の追加を行う
	7～8	研究の修正・追加（2）	指摘された部分について、必要なデータの追加収集（必要時は倫理委員会の変更申請を行う）・解析の追加を行う
	9～10	研究の修正・追加（3）	指摘された部分について、必要なデータの追加収集（必要時は倫理委員会の変更申請を行う）・解析の追加を行う
	11～12	研究の修正・追加（4）	データおよび改正の追加で得られた結果について、再度指導教員らとディスカッションする。
	13～14	プレゼンテーション（1）	学会などの研究成果の発表のための、プレゼンテーションの準備を行う（発表スライドの作成）
	15～16	プレゼンテーション（2）	学会などの研究成果の発表のための、プレゼンテーションの準備を行う（発表原稿の作成）
	17～18	博士論文の作成（1）	博士論文作成（緒言：背景と目的）
	19～20	博士論文の作成（2）	博士論文作成（対象と方法）
	21～22	博士論文の作成（3）	博士論文作成（結果）
	23～24	博士論文の作成（4）	博士論文作成（考察・結論・研究の限界など）
	25～26	博士論文の作成（5）	博士論文作成（図表の作成）
	27～28	博士論文の作成（6）	博士論文作成（参考文献など）
29～30	総括	研究の総括と、今後の課題について考察する	
	定期試験は行わない	成績評価については「成績評価の方法」を参照	
成績評価の基準	A(優)・・・80～100点 B(良)・・・70～79点 C(可)・・・60～69点 D(不可)・・・59点以下		
成績評価の方法	課題・研究テーマに取り組む姿勢（ディスカッションや質問、論文作成状況など）40%と、プレゼンテーション30%やレポート30%による学習内容の理解度から総合的に評価する。		
テキスト	特に設定しない		
参考文献	糖尿病診療ガイドライン2016（日本糖尿病学会編 南江堂）、糖尿病治療ガイド2020-2021（日本糖尿病学会編 文光堂）、日本人の食事摂取基準2020年版（第一出版）、サルコペニア診療ガイドライン2017年版（サルコペニア診療ガイドライン作成委員会 ライフサイエンス出版） その他必要に応じて適切な参考書・先行研究の論文などを使用する。		
科目のキーワード	糖尿病、サルコペニア、低栄養		
授業の特徴	生活習慣病医療学に関連した研究テーマについて課題を抽出し、その解決のための方法を探っていく。資料や文献、先行研究を調べて、自らの研究テーマを決定し実行に移すための計画を立てていく。		
関連科目	アカデミックスキル特論、地域創生学特論、地域創生学演習、実践栄養科学特論		
履修上の注意等（履修条件等）	ヒトを対象とした臨床研究になるため、倫理規定や個人情報保護を遵守し、データの取り扱いについては特に慎重に行う。		

カリキュラム区分	科目名		単位数
	特別研究Ⅲ（3年次・通年）		4単位
担当者職・氏名	教授・柴崎貢志		
授業概要とテーマ	細胞生化学の視点から、生命科学研究を行う上での基本手技と研究知識を身につける。世界最先端の研究を進めるうえでの独創性を意識して研究を進める。研究者としての基本的な資質を身につけるための指導を行う。専門分野の最新学術論文などを精読し、研究成果の理解および課題発見能力を養う。また、研究成果の学会等でのプレゼンテーション能力・ディスカッション能力および学術論文の作成能力を養う。		
到達目標	自分自身で研究計画を立案する立場になった場合に、どのように計画を立て、実行していけば良いのかが考えられるようになることを目標とする。世界トップレベルの研究知見としてどのような報告があるのかを学び、その研究を自分が行った場合にどう参画すべきかを考察できるようにする。特別研究Ⅰ・Ⅱで学んだことを土台により高度な実験技術・知識を身につけることを目指す。		
授業計画	回	主題	授業内容
	1～2	研究成果のまとめ（1）	得られた研究結果を図表化して、そこからどんなことが検証できるのかを考察する。
	3～4	研究成果のまとめ（2）	得られた研究結果の学問的意義を考察する。
	5～6	研究の修正・追加（1）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な修正・追加研究を行う。
	7～8	研究の修正・追加（2）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な研究結果の修正を行う。
	9～10	研究の修正・追加（3）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な研究結果の解釈の修正を行う。
	11～12	研究の修正・追加（4）	他領域の教員からの指摘も含めて、最終的な修正・追加研究を行う。
	13～14	プレゼンテーション（1）	学会や学術雑誌での研究成果の発表のため、プレゼンテーションや論文の執筆を行う（原稿の作成）。
	15～16	プレゼンテーション（2）	学会や学術雑誌での研究成果の発表のため、プレゼンテーションや論文の執筆を行う（図表の作成）。
	17～18	博士論文の作成（1）	これまでの成果を博士論文にまとめる（対象と方法）。
	19～20	博士論文の作成（2）	これまでの成果を博士論文にまとめる（結果）。
	21～22	博士論文の作成（3）	これまでの成果を博士論文にまとめる（緒言）。
	23～24	博士論文の作成（4）	これまでの成果を博士論文にまとめる（考察）。
	25～26	博士論文の作成（5）	これまでの成果を博士論文にまとめる（参考文献の検討）。
	27～28	博士論文の作成（6）	これまでの成果を博士論文にまとめる（必要な追加・修正）。
	29～30	総括	研究の総括と、今後の課題について考察する。
	定期試験は実施しない	成績評価については「成績評価の方法」欄参照	
成績評価の基準	A(優)・・・80～100点 B(良)・・・70～79点 C(可)・・・60～69点 D(不可)・・・59点以下		
成績評価の方法	実験データの精度、解析法の工夫、ディスカッションの深さから総合的に評価する。レポート50%、研究発表50%にて評価をする。		
テキスト	授業ごとにレジメを配布するので、これを参考書代わりに授業を進める。		
参考文献	石崎泰樹 監修・翻訳 イラストレイテッド生化学 原書7版（リップンコットシリーズ）		
科目のキーワード	細胞、応答、感覚、疾患		
授業の特徴	教員から世界最先端の研究知見を紹介する。授業内で学生同士で語り合う時間を設け、様々なディスカッションを行いつつ、研究推進に必要な基礎知識と実験技術の獲得を目指す。		
関連科目			
履修上の注意等（履修条件等）	単位を取得するには前提条件として授業実施回数の3分の2以上の出席を要する。生命科学の奥深さを知るきっかけとして欲しい。		

カリキュラム区分	科目名		単位数
	特別研究Ⅲ（3年次・通年）		4単位
担当者職・氏名	教授・倉橋拓也		
授業概要とテーマ	<p>空気中の酸素ガスを消毒や脱色に利用可能な化学試薬として活用することを目指して、錯体化学や有機化学を基盤に、これまでにない独自の原理に基づく新規装置の開発や空気酸化反応実験の解析を通して社会的応用面を重視した研究指導を行う。特別研究Ⅱに引き続き、研究指導教員による継続的な研究指導体制をとり、博士の学位に相応しいレベルの研究論文を完成することができるよう研究指導を行う。また、必要に応じて他領域の教員からの指導を受けながら、研究成果の学会や学術論文への発表などを通して、高度な研究能力の養成を図る。</p>		
到達目標	<p>1) 先行する研究内容を基に立案した研究方法にしたがって、研究を遂行できる。 2) 研究結果を適切に解釈し、研究結果を適切にまとめることができる。 3) 研究結果を学会や学術論文により適切に発表できる。 4) 得られた研究結果の学問的意義を客観的に理解できる。</p>		
授業計画	回	主題	授業内容
	1～2	研究成果のまとめ（1）	得られた研究結果を考察する。
	3～4	研究成果のまとめ（2）	得られた研究結果の学問的意義を考察する。
	5～6	研究の修正・追加（1）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な修正・追加研究を行う。
	7～8	研究の修正・追加（2）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な研究結果の修正を行う。
	9～10	研究の修正・追加（3）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な研究結果の解釈の修正を行う。
	11～12	研究の修正・追加（4）	他領域の教員からの指摘も含めて、最終的な修正・追加研究を行う。
	13～14	プレゼンテーション（1）	学会や学術雑誌での研究成果の発表のため、プレゼンテーションや論文の執筆を行う（原稿の作成）。
	15～16	プレゼンテーション（2）	学会や学術雑誌での研究成果の発表のため、プレゼンテーションや論文の執筆を行う（図表の作成）。
	17～18	博士論文の作成（1）	これまでの成果を博士論文にまとめる（対象と方法）。
	19～20	博士論文の作成（2）	これまでの成果を博士論文にまとめる（結果）。
	21～22	博士論文の作成（3）	これまでの成果を博士論文にまとめる（緒言）。
	23～24	博士論文の作成（4）	これまでの成果を博士論文にまとめる（考察）。
	25～26	博士論文の作成（5）	これまでの成果を博士論文にまとめる（参考文献の検討）。
	27～28	博士論文の作成（6）	これまでの成果を博士論文にまとめる（必要な追加・修正）。
	29～30	総括	研究の総括と、今後の課題について考察する。
		定期試験は実施しない	成績評価については「成績評価の方法」欄参照
成績評価の基準	<p>A(優)・・・80～100点 B(良)・・・70～79点 C(可)・・・60～69点 D(不可)・・・59点以下</p>		
成績評価の方法	<p>実験結果を取りまとめて考察を加えたレポート（50%）とその内容をわかりやすく伝える発表と発表内容に対する質疑応答（50%）で評価する。</p>		
テキスト	特に設定しない。		
参考文献	ボルハルト・ショアー 現代有機化学 化学同人 2019		
科目のキーワード	酸化反応、空気酸化、光化学反応		
授業の特徴	<p>有機化学に関連した研究テーマについて課題を設定し、その解決に向けての方策を学ぶため、特別研究Ⅱに引き続き、研究の実行方法、結果の解釈・解析方法、考察とまとめ、プレゼンテーションの方法等について習得する。</p>		
関連科目	アカデミックスキル特講、地域創生学特講、地域創生学演習、実践栄養科学特講、特別研究Ⅰ、特別研究Ⅱ		
履修上の注意等（履修条件等）	<p>栄養科学分野に限らず、地域社会学や情報学の観点も加味した研究成果を期待する。</p>		

カリキュラム区分	科目名		単位数
	特別研究Ⅲ（3年次・通年）		4単位
担当者職・氏名	教授・田中進		
授業概要とテーマ	形態機能学ならびに再生生物学をテーマに組織再生や正常機能発現、および恒常性維持に寄与する因子の同定ならび代謝性疾患の病態解明、診断法の開発、新規治療法を目指して、培養細胞実験、動物実験あるいは臨床研究を通して研究指導を行う。特別研究Ⅱに引き続き、研究指導教員による継続的な研究指導体制をとり、博士の学位に相応しいレベルの研究論文を完成することができるよう研究指導を行う。また、必要に応じて他領域の教員からの指導を受けながら、研究成果の学会や学術論文への発表などを通して、高度な研究能力の養成を図る。		
到達目標	1) 研究テーマについて自ら実験計画を立案し、実験を遂行し研究を展開することができる。 2) 形態学的手法ならびに機能解析手法の理論と実際に習熟し、実験結果を正しく解釈できる。 3) 研究結果の総括を行い、口頭発表や論文執筆を行うことができる。 4) 他者の意見を取り入れ、研究遂行においてフレキシブルな対応をすることができる。		
授業計画	回	主題	授業内容
	1	研究成果のまとめ（1）	得られた研究結果を考察する。
	2	研究成果のまとめ（2）	得られた研究結果の学問的意義を考察する。
	3	研究の修正・追加（1）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な修正・追加研究を行う。
	4	研究の修正・追加（2）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な研究結果の修正を行う。
	5	研究の修正・追加（3）	他領域の教員からの指摘も含めて、必要な研究結果の解釈の修正を行う。
	6	研究の修正・追加（4）	他領域の教員からの指摘も含めて、最終的な修正・追加研究を行う。
	7	プレゼンテーション（1）	学会や学術雑誌での研究成果の発表のため、プレゼンテーションや論文の執筆を行う（原稿の作成）。
	8	プレゼンテーション（2）	学会や学術雑誌での研究成果の発表のため、プレゼンテーションや論文の執筆を行う（図表の作成）。
	9	博士論文の作成（1）	これまでの成果を博士論文にまとめる（対象と方法）。
	10	博士論文の作成（2）	これまでの成果を博士論文にまとめる（結果）。
	11	博士論文の作成（3）	これまでの成果を博士論文にまとめる（緒言）。
	12	博士論文の作成（4）	これまでの成果を博士論文にまとめる（考察）。
	13	博士論文の作成（5）	これまでの成果を博士論文にまとめる（参考文献の検討）。
	14	博士論文の作成（6）	これまでの成果を博士論文にまとめる（必要な追加・修正）。
	15	総括	研究の総括と、今後の課題について考察する。
	16	定期試験は実施しない	成績評価については「成績評価の方法」欄参照
成績評価の基準	A(優)・・・80～100点 B(良)・・・70～79点 C(可)・・・60～69点 D(不可)・・・59点以下		
成績評価の方法	授業に取り組む姿勢（研究内容に対するディスカッション、研究発表状況、関連文献紹介状況）を評価する。また授業内容の理解度を実験ノートならびにレポート（科学的、論理的に記述されているかを重視）にて評価する。 ディスカッション20%、研究発表状況30%、関連文献紹介状況15%、実験ノート15%、レポート20%		
テキスト	特に設定しない。		
参考文献	Tanaka S et al. Vitam & Horm 2012 89: 75-90., BBI 2016 57:58-67, IJMM 2019 43(5):2164-2176. Takizawa N et al. Sci Rep 2018 8(1):14542. Murata H et al. JBC 2020 295(28):9596-9605, JCM 2021 10(2) 351 その他、各自必要に応じて適切な参考書を選択すること。		
科目のキーワード	形態機能学、再生生物学、睡眠科学、摂食中枢、代謝性疾患、生殖医学		
授業の特徴	形態機能学・再生生物学に関連した研究テーマについて課題を設定し、その解決に向けての方策を学ぶため、研究テーマの選択、作業仮説の立案、研究計画の立案、研究の実行方法について習得する。		
関連科目	アカデミックスキル特講、地域創生学特講、地域創生学演習、実践栄養科学特講		
履修上の注意等（履修条件等）	栄養科学分野に限らず、地域社会学や情報学の観点も加味した研究テーマの設定を期待する。		

カリキュラム区分	科目名		単位数
	特別研究Ⅲ（3年次・通年）		4単位
担当者職・氏名	准教授・駿河和仁		
授業概要とテーマ	栄養生理学の視点から、ビタミンAおよびβ-カロテンなどの脂溶性栄養素の吸収や代謝機能が、どのような生理的要因で変動するのか、さらにそのメカニズムを解明することを目指し、動物実験や培養細胞実験を通して研究指導を行う。具体的には、特別研究IおよびIIの結果の総括から最終的な研究目標を確定し、博士の学位に相応しいレベルの研究論文を完成することができるように必要に応じ追加研究も行うように研究指導を行う。		
到達目標	1) 特別研究IおよびIIの結果をまとめ、最終的な研究目標を確定し、研究を遂行できる。 2) 研究結果を学会や学術論文により発表できる。 3) 最終的に研究成果を博士学位論文としてまとめることができる。 4) 学位取得後の進路について決定することができる。		
授業計画	回	主題	授業内容
	1~2	研究I結果の検証	特別研究IおよびIIの結果を検証し、研究Ⅲの実施に向けて、研究計画の見直し・修正等を行う。
	3	研究Ⅲの計画の立案および準備	研究Ⅲの研究計画を立案し、その計画案について、研究指導教員と意見交換を行い、研究計画を決定する。
	4~6	研究Ⅲの実施（1）	動物実験または培養細胞実験を行う（動物飼育、細胞培養）。
	7	研究Ⅲの実施（2） （研究進捗の報告含む）	研究の進捗状況の報告。
	8~10	研究Ⅲの実施（3）	動物実験または培養細胞実験を行う（生体試料の分析・統計処理）。
	11	研究Ⅲの実施（4） （研究進捗の報告含む）	研究の進捗状況の報告。
	12	博士論文の作成準備	博士論文に必要な結果を精査し、論文テーマ、論文構成案に設定し、研究指導教員および副指導教員と意見交換を行い決定する。
	13~15	博士論文の作成（1）	研究成果を博士論文にまとめる（対象と方法）。
	16~19	博士論文の作成（2）	研究成果を成果を博士論文にまとめる（結果）。
	20~22	博士論文の作成（3）	研究成果を成果を博士論文にまとめる（緒言、参考文献）。
	23~25	博士論文の作成（4）	研究成果を成果を博士論文にまとめる（考察、参考文献）。
	26	博士論文の作成（5）	研究指導教員からの指摘に対する博士論文（第1稿）の追加・修正。
	27	博士論文の作成（6）	研究指導教員からの指摘に対する博士論文（第2稿）の追加・修正。学位論文提出。
	28~29	博士論文の審査（1）	提出した学位論文の審査。審査委員からの指摘事項に対して論文の最終的な加筆・修正等を行う。
	30	博士論文の審査（2）	学位論文内容のプレゼンテーション（最終試験）、公開発表会
	定期試験は実施しない	成績評価については「成績評価の方法」欄参照	
成績評価の基準	A (優)・・・80~100点 B (良)・・・70~79点 C (可)・・・60~69点 D (不可)・・・59点以下		
成績評価の方法	研究課題に取り組む姿勢（概ね80%）と研究成果（概ね20%）などから総合的に評価する。		
テキスト	特に指定しない。		
参考文献	特に指定しないが、学術論文等の資料を必要に応じて紹介する。		
科目のキーワード	ビタミンA、β-カロテン、脂溶性栄養素、吸収・代謝、遺伝子発現調節		
授業の特徴	研究テーマに対し、最終的な目標を設定し、最終目標達成に向けた研究の計画立案および実施・考察・再検証を繰り返し、博士論文としてまとめあげる。		
関連科目	基礎栄養科学特講、実践栄養科学特講		
履修上の注意等 （履修条件等）	研究に対し主体的かつ真摯に取り組む、研究成果に対しても客観的、多角的な考察も行う。		

カリキュラム区分	科目名	単位数	
	特別研究Ⅲ（3年次・通年）	4単位	
担当者職・氏名	准教授・松澤哲宏		
授業概要とテーマ	食品衛生学、特に食品汚染の原因となる真菌に関する研究指導を行う。真菌による食品汚染の防止や汚染菌の簡易同定法の開発など、時代の変化に対応した課題について研究指導を行う。特別研究Ⅱに引き続き、研究指導教員による継続的な研究指導体制をとり、博士の学位に相応しいレベルの研究論文を完成することができるよう研究指導を行う。また、必要に応じて他の研究者からの助言を受けながら、学会発表や学術論文の投稿などを通して、高度な研究能力の養成を図る。		
到達目標	1) 立案した研究計画および研究方法にしたがって、研究を遂行できる。 2) 得られた結果を適切に解釈し、適切にまとめることができる。 3) 研究結果を学会で発表し、学術論文を投稿できるようになる。 4) 研究成果の学術的意義を客観的に理解できる。		
授業計画	回	主題	授業内容
	1～2	研究成果のまとめ（1）	得られた研究結果について考察する。
	3～4	研究成果のまとめ（2）	得られた研究結果の学術的意義を考察する。
	5～6	研究の修正・追加（1）	他研究者からの指摘も含めて、必要な修正・追加研究を行う。
	7～8	研究の修正・追加（2）	他研究者からの指摘も含めて、必要な研究結果の修正を行う。
	9～10	研究の修正・追加（3）	他研究者からの指摘も含めて、必要な研究結果の解釈の修正を行う。
	11～12	研究の修正・追加（4）	他研究者からの指摘も含めて、最終的な修正・追加研究を行う。
	13～14	プレゼンテーション（1）	学会発表や学術雑誌への投稿のため、プレゼンテーションや論文の執筆を行う（原稿の作成）。
	15～16	プレゼンテーション（2）	学会発表や学術雑誌への投稿のため、プレゼンテーションや論文の執筆を行う（図表の作成）。
	17～18	博士論文の作成（1）	研究成果を博士論文にまとめる（対象と方法）。
	19～20	博士論文の作成（2）	研究成果を博士論文にまとめる（結果）。
	21～22	博士論文の作成（3）	研究成果を博士論文にまとめる（緒言）。
	23～24	博士論文の作成（4）	研究成果を博士論文にまとめる（考察）。
	25～26	博士論文の作成（5）	研究成果を博士論文にまとめる（参考文献の検討）。
	27～28	博士論文の作成（6）	研究成果を博士論文にまとめる（必要な追加・修正）。
29～30	総括	研究の総括と、今後の課題について考察する。	
	定期試験は実施しない	成績評価については「成績評価の方法」欄参照	
成績評価の基準	A(優)・・・80～100点 B(良)・・・70～79点 C(可)・・・60～69点 D(不可)・・・59点以下		
成績評価の方法	ディスカッション(50%)および発表(50%)にて評価する。		
テキスト	特に設定しない。		
参考文献	Powell, et al. (Eds): The Genus Aspergillus, Springer Book Archive, 1994 Watanabe T. (Ed): Pictorial Atlas of Soil and Seed Fungi: Morphologies of Cultured Fungi and Key to Species, Third Edition, CRC Press, 2010 宇田川 俊一: 食品のカビ汚染と危害, 幸書房, 2004 その他、各自必要に応じて適切な参考書を選択すること。		
科目のキーワード	真菌の分類学、食品危害菌、分子生物学、形態学		
授業の特徴	食品衛生学関連した研究テーマについて課題を設定し、課題の解決に向けての方策を学ぶため、特別研究Ⅱに引き続き、研究の実施方法、結果の解析方法、得られたデータの考察の方法等について習得する。		
関連科目	アカデミックスキル特講、地域創生学特講、地域創生学演習、基礎栄養科学特講、特別研究Ⅰ、特別研究Ⅱ		
履修上の注意等 (履修条件等)	食品衛生に関する研究だけではなく、微生物学に広く興味・関心を持ち、自身の研究の社会的意義についても意識できるようになることが望ましい。		

カリキュラム区分	科目名		単位数
	特別研究Ⅲ（3年次・通年）		4単位
担当者職・氏名	准教授・飛奈卓郎		
授業概要とテーマ	身体活動、運動や身体能力に焦点を当てて、人々の健康の維持・増進や身体パフォーマンスを向上させるための方法が提案できるような研究を進めるための指導を行う。特別研究Ⅰで計画をした研究を継続して推進するとともに、得られたデータを検証しながら必要に応じて修正をしてデータを収集して統計処理を行い結果を解釈する。		
到達目標	1) 先行する研究内容を基に立案した研究方法にしたがって、研究を遂行できる。 2) 研究結果を適切に解釈し、研究結果を適切にまとめることができる。 3) 研究結果を学会や学術論文により適切に発表できる。 4) 得られた研究結果の学問的意義を客観的に理解できる。		
授業計画	回	主題	授業内容
	1～2	研究成果のまとめ（1）	得られた研究結果を考察する。
	3～4	研究成果のまとめ（2）	得られた研究結果を先行研究と比較して考察を深める。
	5～6	研究の修正と今後の課題（1）	投稿用論文の原稿を指導教員並びに共同研究者とディスカッションしながら修正する。また次の研究課題を見出す。
	7～8	研究の修正と今後の課題（2）	投稿用論文の原稿を指導教員並びに共同研究者とディスカッションしながら修正する。また次の研究課題を見出す。
	9～10	研究の修正と今後の課題（3）	投稿用論文の原稿を指導教員並びに共同研究者とディスカッションしながら修正する。また次の研究課題を見出す。
	11～12	研究の修正と今後の課題（4）	投稿用論文の原稿を指導教員並びに共同研究者とディスカッションしながら修正する。また次の研究課題を見出す。
	13～14	プレゼンテーション（1）	学会や学術雑誌での研究成果の発表のため、プレゼンテーションや論文の執筆を行う。
	15～16	プレゼンテーション（2）	学会や学術雑誌での研究成果の発表のため、プレゼンテーションや論文の執筆を行う。
	17～18	博士論文の作成（1）	これまでの成果を博士論文にまとめる。
	19～20	博士論文の作成（2）	これまでの成果を博士論文にまとめる。
	21～22	博士論文の作成（3）	これまでの成果を博士論文にまとめる。
	23～24	博士論文の作成（4）	これまでの成果を博士論文にまとめる。
	25～26	博士論文の作成（5）	これまでの成果を博士論文にまとめる。
	27～28	博士論文の作成（6）	これまでの成果を博士論文にまとめる。
29～30	総括	研究の総括と、今後の課題について考察する。	
	定期試験は実施しない	成績評価については「成績評価の方法」欄参照	
成績評価の基準	A（優）・・・80～100点 B（良）・・・70～79点 C（可）・・・60～69点 D（不可）・・・59点以下		
成績評価の方法	授業に取り組む姿勢と学習内容の理解度から総合的に評価する。		
テキスト	特に設定しない。		
参考文献	Exercise Physiology: Nutrition, Energy, and Human Performance. 8th edition. Lippincott Williams & Wilkins. 2014. その他、各自必要に応じて適切な参考書を選択すること。		
科目のキーワード	健康づくり、身体能力、有酸素性作業能力、最大酸素摂取量、生活習慣病予防		
授業の特徴	これまでに得た研究データをまとめると同時に、次の研究課題を見つけて今後の研究活動につなげていく。		
関連科目	アカデミックスキル特講		
履修上の注意等（履修条件等）	大学院修了後に独り立ちして研究を進めるための基盤が身につくよう、極めて主体的な取り組みを期待する。		